

---

Phasm/Maskd rider

ラージ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Phasm/Maskdrider

### 【Nコード】

N9845Y

### 【作者名】

ラージ

### 【あらすじ】

聖杯戦争 万能の願望機『聖杯』を求めて、魔術師たる七人のマスターと、英霊たる七人のサーヴァントによる熾烈を極めしバトルロイヤル。本来は七組しか参加を許されないこの大戦に、例外にして規格外の八番目が参戦する。復讐者の座を得て現界せし者は、神秘なる宇宙の力を纏い、幻想戦士へと変身する！  
冬木の地に集いし遍く英雄らと戦い、勝利を掴め、仮面ライダーフアズム！

## 召・喚・変・身（前書き）

満を持して遂に降臨！

とうとう新連載の記念すべき第一話目！

複雑な世界観で構成された作品を原作としていきますので、若干至らない点もあるかもしれませんが、徐々に慣らしていこうと思います。もし仮に読者さん達の温かい声援を頂ければ幸いです。

それでは、神秘と科学、魔術と幻想によって織り成される奇蹟の物語の開幕です！

## 召・喚・変・身

全ての始まりは、とある月夜にて始まった。

人の気配がまるでない殺風景な広場の地面に、人の鮮血と溶けた鉄を混ぜ合わせ、約2mほどの魔方陣を描く者がいた。消去の中に退去、退去の陣を四つ刻み、召喚の陣で囲んだものだ。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に到る三叉路は循環せよ」

術者はボロ布マントのようなローブで身体を隠し、さらにはフードで頭も隠していた。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

術者は無機質な口調で淡々と、完成した魔方陣に向かい合って呪文を詠唱し出す。

身体に刻まれた聖痕 れいじゆ 令呪の存在を意識しつつ、一節一節を丁寧に紡いでいく。

一言一言が口から発せられる度に、術者は自身の内側が起動し出していることを心身で感じ取る。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

詠唱が進んでいくごとに、真っ赤な血の魔方陣はどんどん光を得て

輝いていく。

呪文の通り、術者の意思に伝えるかのように。

「誓いを此処に。我は常世総ての善となる者、我は常世総ての悪を敷く者」

魔方陣の反応が激しくなっていく一方で、術者の内部にある全ても活性化していた。

魔術師の生命線たる第二の神経と言える小源<sup>オト</sup> 術者の生命力と大気の大源<sup>マナ</sup>を魔力に生成する魔術回路が、今行われている魔術の発動に際してフル稼働しているのだ。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

呪文の詠唱が完了したと同時に、魔方陣の光輝は一気に桁外れであり段違いのものとなって炸裂した。

術者は繋がった経路<sup>パス</sup>から己が身における多大な魔力を一瞬で持つて行かれた感触を自覚したとき、この降霊であり召喚である魔術が成功したことを確信した。

光と風が治まり、雄姿を現すのは伝説と幻想の象徴とされた者。

人の身でありながら人の領域を越え、精霊級の存在として崇められた者。

かの者は、その身体に常軌を逸し過ぎた魔力と神秘を秘め、強い思念を言葉にして眼前に居る召喚者に投げかける。

「訊こう。君が僕のマスターなのか」

『世界』そのものに認められた英霊を降臨させ、サーヴァントと呼

称される存在として使役する奇蹟は、今この時に果たされたのだ。

「妾が汝を召喚した」

術者である女はそう静かに告げてフードをとり、全身を頭わにする。まるで高級芸術品のよういきめ細かく整った顔立ち、ルビー色の瞳、血潮のように赤黒く艶やかで膝まで届くロングヘア。

服装は上半身に黒いタートルネック、下半身に黒いロングスリットスカートと言った物だ。

「サーヴァント・アヴェンジャー。召喚に従い推参させてもらった。これより僕の力は君と共に在り、君の命運は僕と共に在る。ここに、契約は完了した」

冬の寒気を伝える風が吹く中、銀髪碧眼の青年は、自らを復讐者と名乗った。

\*\*\*\*\*

冬木教会　冬木市新都の郊外の小高い丘の上に建つ建物の名前だ。冬木市には、中央の大きな未遠川を隔て、都市開発の進んだ新都と未だ旧き良き雰囲気が残った深山町とで分かれており、双方の町の出入りは主に未遠川に掛かった冬橋大橋を渡ることになる。

元々冬木市は西洋人たちが多く移住してくるといふ特色があり、無宗教者の多い日本と違って、神に祈りを捧げることが当たり前とし

ている移住者の為に、この冬木教会があるのだ。  
しかし、日曜日には聖書バイブルなり十字架ロザリオなりを持って来る信者達で礼拝チャ堂ベルが開かれる光景の裏において、この教会は魔術という神秘の力を隠蔽する為に活用される。

そんな冬木教会は、本来なら60年周期で行われる筈が、今回はたった10年の経過で降霊・召喚する事となった万能の願望機たる”聖杯”を巡るバトルロイヤル 『聖杯戦争』を監督する任を帯びている。

「ほう」

冬木教会の礼拝堂において、屈強な体付きをした長身に黒い神父服を纏った男が、興味深そうに表情を緩めている。

「昨日の深夜に凜が召喚したサーヴァントに続いて、新たなサーヴァントが召喚されたか」

礼拝堂の奥で面白そうに、サーヴァントの現界を感知する『靈器盤』アウエンジャーによって参加者の存在を確認している神父。

「外来のマスターのようだが……この『靈器盤』の反応からして、サーヴァント諸共、歪な存在のようだな」

神父はほんの少しだけ疑わしげな表情になるもすぐさま、

「今回の第五次聖杯戦争は、中々どうして、面白くなりそうだ」

神父・言峰綺礼ここみね きれいは、神に仕える聖職者とは程遠い、悪辣じみた笑顔を浮かべていた。

\*\*\*\*\*

突然だが、この殺風景な広場には生氣という物が一向として感じられない。

冬木の住人の殆どがこの場所のことを知っており、その来歴ゆえに来ることを無意識に避けることもあれば、この場所に染み付いたナニかを感じ取って避けることだつてある。

最も、必要におうじて仕方なくこの場所を訪れたり通つたりする者もいるだろう。

それもその筈だ。

なにしろこの広場は、十年前に起こつた謎の大火災によって焼け落ちた町の一角だつた場所なのだから。それによつて何十という建物と何百という命が燃え尽きてしまつたのだ。

例え靈感が無くとも感じるのかもしれないが　この広場には怨念めいた雰囲気は漂つていて、それが人々を寄せ付けない原因となつているのだろう。

広場として解放されているこの場所が、如何して何時までも殺風景なまま放置されているのか、これで解つてもらえただろう。

「・・・・・・・・すうう、はああ・・・・・・・・」

そのような殺伐とした広場の草原で、銀髪碧眼の青年　アヴェンジャーは深呼吸をしていた。



まるで、故郷を懐かしむように深々と。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その隣で、彼を召喚したマスターが、アヴェンジャーの姿をまじまじと見ている。

180cmジャストの細身ながらも鍛えられた肉体、顔つきも中々に整っている。

紐を通した黄金の指輪をペンダントにして首にかけ、両手首には純銀のブレスレットをしている。

特殊な模様が描かれていることから魔術的な装飾品だろうが、女術師が気にかけてのはもっと別のところである。

率直に述べると、アヴェンジャーの服装は余りにも現代的なのだ。足には黒いスニーカー、下半身には黒いカーゴパンツ、上半身には灰色の長袖Tシャツに安っぽい黒のジャケットである。

とても過去の時代で活躍した人間の着る服ではないだろう。しかもこれらの服は別にマスターが買いつけたとかそんなではなく、アヴェンジャー自身が召喚された時から既に身につけていた物なのだ。

「まったく・・・・・・・・」

女は召喚直後の自分が如何に間抜けなことになっていたかを痛感している。

一目見れば一発で気付くようなことを、数分経って漸く気付いている自分のアホらしさに。

「マスター」

そこへ、アヴェンジャーが深呼吸を終えて女に話しかけてきた。

「どうしたアヴェンジャー？」

「君の名前は？」

「……名前？」

訊いたことは、極々当たり前なものだった。

「ああ……妾の名は、カース」

女は少し奇妙な思いに駆られるも、ここは後々の事を考えて素直に名乗っておくことにした。

「そうか。じゃあカース。そろそろ此処から離れるとするか。召喚で生じた魔力を嗅ぎ付けてくるヤツは必ずいるだろうからな」

「ああ、そうじゃな」

カースはアヴェンジャーの言葉に頷く。

まあしかし、召喚してから数分が経過して尚、敵勢の使い魔の一匹さえ未だに来ていないことが幸運なのだが。

「ではマスター、ちょっと失礼するぞ」

アヴェンジャーはカースの肩と脚を持って、所謂お姫様抱っこをされました。

「ふむ。思いのほか悪くないのだな」

抱っこされているカース自身もまんざらではないようだ。

「すまぬが、暫定的な隠れ家と器材の置き場になっている、郊外の寂れた工場に向っておくれ」

「容易い仕事だな。しっかり掴まっけていてくれよ」

そうして一組の主従は流星の如き速さで真冬の空を跳び回って行った。

これから始まっていく大いなる運命の胎動を予感しながら。

\*\*\*\*\*

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

何処とも知れぬ暗い場所。

そこには一体の異形が何かを見張っていた。

身体に外套を羽織クロックっていて奇妙な存在感を持ち合わせているようであり、その異形は静寂な雰囲気さえも併せ持っていた。

『奴め・・・・・・・・とつとつ』

異形の備え持つ眼球には、銀髪碧眼の青年の姿が捉えられていた。その視線は、まるで生涯における天敵を警戒するかのような、殺気に満ちたものであった。

『はてさて、どんな輩をぶつければいいのか？』

殺気を残したまま何処か楽しげに、異形は己が手中にある物を見つめた。

何か違和感を覚えさせる”スイッチ”を手にしながら。

\*\*\*\*\*

郊外の廃工場。

十年ほど前から滅多に人の訪れない場所で、その広大さと複雑な造り故に誰かが隠れ住んだりするには持つて来いの場所である。

そう、例えばどこぞのマスターの暫定的な隠れ家になったりとか。

「到着だな」

スタ、という軽やかな足音さえ極力立てることなく、アヴェンジャーは目的地に辿り着く。

「ご苦労」

そんなアヴェンジャーにお姫様だっこされながら、カースは礼を言っ  
つて降りる。

「ではついて参れ。工場の休憩部屋にあらかたの物品を置いてある  
のでな」

古風な口調を使いながら、カースはアヴェンジャーを先導するよう  
に工場内に入っていく。

だがしかし、

「マスター、失礼！」

「へ？」

バツ！

「んっ！？」

アヴェンジャーが突如として、カースの背中に張り手をかまして彼女の身体を工場の奥の壁に叩き付けた。

「く、うう………何の真似だ？まさか、敵襲？」

「ご明察だな、我が主よ」

痛みをこらえながら背中を擦るカース。

些事に心を大きく動かすことなく、魔術師としての冷静な判断を下す。

アヴェンジャーの視線はカースではなく、こちらに先を飛ばしてきた敵兵に向けられていた。

「さて、どうするんだ？君は此処にいるのか、それとも、荷物を先に持っていくか？」

「問われるまでも無い。ここでそなたの力の一端を拝ませてももらうことにいたそう」

カースは腕を組んでハッキリと断言する。

それを聞いてアヴェンジャーは何故か嬉々とした表情を顔面に貼り付ける。

「じゃあ、特等席で御覧じろ」

アヴェンジャーは得意げに口を動かすと同時に身構えする。そして、敵兵は此方の準備完了の瞬間に現れた。

「なんだ。テメエ思ったより勘が良いみてえだな」

現れたのは莫大な魔力の塊といえる存在、サーヴァント。

青い髪、赤い瞳、獣じみた荒っぽい顔立ち。

身体には青を主軸にして、銀のラインが五体に広がり肩部分に装甲が取り付けられた、まあ……全身青タイツと形容できそうな感じの格好である。

ただし、その男の手には、一本の赤き長槍が握られている。

「ランサーか。流石は”猛犬”だけあって鼻が利くらしいな」

アヴェンジャーは襲撃者のクラス名を呟いた。

その直後に、ランサーにとって聞き逃せない言葉まで出てきたが。

「……貴様、召喚されて間もない筈だろうが。どうやって俺の真名を探り当てやがった？」

「大したことじゃない。ただ知っていただけに過ぎない」

ランサーの殺気が絡んだ様子など受け流すかのように、アヴェンジャーは飄々としている。

そんな気軽な態度をとる銀髪碧眼の青年は、自分たちの姿を後方で見ている女に向って、

「マスター。これから見せてやる。僕の力の一端を」  
「ああ……存分に示せ」

カースはアヴェンジャーの力を、自身のサーヴァントの力を信じて、第一戦目を任せた。

だがしかし、カース自身も疑問に思っていた。

どうして初対面の敵サーヴァントの正体を知っていたのかを？

でもそれを問うのは後で出来ることであり、今は戦って生き残ることこそが最優先すべきなのだ。

「では始めるぞ？ランサー」

「当然だ。ついでにお前が何処の英雄かくらいはハッキリさせねえとな」

ランサーは長槍を力強く構えて、野獣じみた視線をアヴェンジャーにぶつけている。

だがアヴェンジャーはその視線による圧迫感すら物ともせず、両腕を構えて一言発した。

「シャドー・オン  
投影開始」

唱えられた短い呪文。

それが言い終わった途端、彼の両手にはある物が現れていた。

それは針山の如く荒々しい造形の長槍。しかも黒い何かに染め上げられ闇属性と化した一本の神秘。

（なんだ？あれがアヴェンジャーの宝具？

否、あれはヤツ自

身の得物ではない……………のか?)

カースは自らのサーヴァントが握っている武器を見て、謎のサーヴァントにより一層謎が増していくのを感じた。

基本的にサーヴァントの持つ武器は、生前の時代に使用した愛用の物品であることが殆どである。

それらは彼等が英雄として伝説に名を連ねることで、人々の幻想が長い月日をかけて「ノウフル・ファンタズム 貴い幻想」と呼ばれる神秘へと昇華させるのである。

そして、担い手は英霊という法外の存在に、武器は宝具という必殺武器となる。

「本職の槍ランサーの英霊を相手に、槍で勝負を張るなんざ、正気か?」

「悪いが今は、僕の本来の宝具を開帳するには早すぎる」

「チツ、ナメヤがって」

ランサーはアヴェンジャーの物言いに不機嫌となり、露骨に舌打ちした。

「苛立ったのなら、これから晴らせばいい」

「挑発したクセして大きな口を叩くと……………死ぬぜ?」

「まだ消えるつもりは無い」

その会話が途切れた直後、

「そんじゃまあ……………」

「行くかつ」



ガギンツ！

二本の穂先が激突した。

「オラ行くぜええ！！」

「ダアアアアア！！」

繰り広げられる黒槍と赤槍の攻防。

長槍による攻撃の中で最も速いとされている”突き”の一撃を、双方は何度と無く打っては引き打っては引き打っては引きを何度も繰り返している。

両人の動きに無駄は無く、まるで狙撃銃の連射を目撃しているかのようだ。

しかし、そんな攻防の拮抗は一分もモツことなく崩れる。  
そして理由は単純だ。

「遅せえな！」

ギンツ！

「ん………ツ」

ランサーは敏捷さに優れたクラスで、ランクにすればA判定となるだろう。

だがアヴェンジャーの現状態のステータスは、目の前のランサーに比べて大きく劣っている。当然、槍術と速度で勝負すればランサーが勝つに決まっている。

「流石だな、ランサー」

「無駄口叩いてる暇があんのか？」

アヴェンジャーとランサーは一度距離をとってお互いの様子を見合う。

状況としてはアヴェンジャーの方が圧倒的に押されている。だというのに彼は余裕の態度を崩そうとはしなかった。

傍からすれば虚勢にしか見えなかっただろう。

なにしろ今のアヴェンジャーの身体中には赤槍による切り傷が数多く付けられているのだから。

「伊達に克蘭の猛犬とは呼ばれていないわけか。今の僕ではあらゆる面で太刀打ちできそうに無い」

ガギンッ！

などといいつつも、アヴェンジャーは黒き槍を突き出す。当然、猛犬の振るう赤き槍によって穂先は弾かれていく。

「おいおい。始まってまだそんなに時間は経ってないんだが、もう降参する気か？」

「冗談は程々にしてくれないか」

皮肉な表情で言い合う二人の英霊。

だがランサーは傷一つ負わず、宝具の真名解放もしない内に、目の前にいるアヴェンジャーの五体に相当な切り傷をつけている。

しかし、ここから状況は一変した。

「フッ！」

「なに？」

唐突にアヴェンジャーはランサー目掛けて黒い槍を投擲してきた。低ランクとはいえサーヴァントの腕力で投げられた槍の速度はかなりのモノとなっている。しかし、

「無駄口の次は投げやりか？」

ランサーは詰まらなげに言葉を吐き捨てた。

鈍い金属音を鳴らし、黒い槍を赤き槍で叩き落とし、自分の足元に転がしながら。

しかし、その瞬間にアヴェンジャーの口元は三日月のように不気味な様相を見せる。

「?」

ランサーは一瞬だけ敵の笑顔の意味を判別しかねた。それによって生じた僅かな隙が命取りとなる。

アヴェンジャーは急いでランサーから距離をとって、一言だけ呟いた。

フロークン・ファンタズム  
「壊れた幻想」

ドウガアアアアアアン！！

その一言だけをトリガーに、あたり一面が吹き飛んだ。

ランサーに足元に転がった一本の黒槍に宿っていた魔力が爆発物と

して一気に炸裂したのだ。

「ぐおお………ツ!!!?」

至近距離での爆発により、ランサーは全身に爆炎を浴びながらも、身体に染み付いた動きで逸早く炎から脱出した。

無論、ダメージの方は相当なものになっているが、それ以上に気になることがある。

「て、めエ………宝具を使い捨て、るなんざ………」

爆発によってその身に大きな傷を負うランサーだが、この程度で死ぬほど彼の生き汚さは半端ではない。寧ろ今アヴェンジャーが行った攻撃方法について知ろうと食い下がっている。

ブローケン・ファンタズム

”壊れた幻想”とは、サーヴァント同様に強力な魔力の塊である宝具を爆弾として使用することで、常識を遥かに越える威力の爆発を一度限り起こすことが出来る。

だがこれは聖杯戦争における暗黙の禁じ手だ。

なぜなら、自らの宝具に代えは無く修復にも時間と労力を必要とする上、聖杯戦争を勝ち抜く上で必殺の決め手である宝具の発動は欠かせない。

故に、己が宝具を態々爆発させるなどという行為は、自分から勝機を手放すことに等しい。

「君に重症を負わせる為となれば、この程度の出費で済んだのは幸運だと思っのだが」

そんな大それた真似をしたというのにアヴェンジャーは何の気負いもしていない。

「それよりランサー。自分でやっついてアレだが、今の爆発で他の連中が気付いた筈だが？」

「デメエ……そういう、腹積もりか」

要約すると、もう直ぐ別のサーヴァントがやって来るかもしれないからさっさと失せやがれ、ということである。

「つくづく喰えない野郎だ。やるだけやっついて、このザマとはな」「なら君のマスターに伝えておくと良い。この僕を本格的に倒すと言うのならば、令呪の縛りを抜きにしたガチバトルを張れとな」

「ケツ、とことんいけ好きな物言いだが、しゃあねえ……俺んトコのマスターも視覚共有で戦況を見た途端に帰って来いと言い出してきやがった」

ランサーは槍を強く握り締めながら告げると、

「取り合えず今回は此処までだが、その前に訊いておくぞ。何

者だ貴様？」

「八番目の存在、クラス復讐者アヴェンジャー」

「イレギュラークラスか。次会ったら今言った八番目って言葉の意味も含めて、この槍でお前の化けの皮を剥がしてやる」

霊体化して姿を消した。

元々サーヴァントは莫大な魔力を糧に現世に存在する霊的存在だ。隠密や魔力温存に務める際は、肉体を構成する魔力を内側に押し留めて実体から霊体になっておくのがセオリーだ。

それをやったからには大方マスターのところへ戻ったのだろう。アヴェンジャーは傷だらけの身体でカースのところへ歩み寄った。

「どうだったマスター、初戦を見た感想は？」  
「うむ。言いたいことが色々あるのだが、特に言いたい事が一つある」

カースは薄暗い廃工場の壁に寄りかかりながら、

「アヴェンジャー。お前は一体何処の英雄だ？真名くらい教えろ」  
「ああ、やはりそうくるか」

真剣なカースとは裏腹にアヴェンジャーは頭を掻きながら困った風  
にしている。

「…………その件を含めて当面は僕の正体について質問するの  
は止して欲しい。時期が来たら話す」

「その発言はマスターである妾を舐めていると受け取って良いのか  
え？」

素敵な笑顔の裏に影を感じる。

こうなると判ってはいるものの、いざ相對すると結構精神的な威圧  
感に襲われる。

「失礼千万なのは重々承知している。だが、一気に全部を暴露する  
と、今後の出来事に差支えがある……………」

「では、さきほど使った宝具についてぐらいは教えてもらおうか」  
「……………あれは、投影魔術」

答え辛そうな仕草を見せつつも、アヴェンジャーは素直に返事した。

「僕はこう見えて、普通じゃない投影魔術の使い手なのだ。属性の

ほうも、架空元素の虚数属性だ」

「……あなたが生きてる頃に協会連中が気付いておったら、目から鱗が出ん勢いで追い掛け回したのであるうな……」

宝具レベルの武装を投影魔術で再現できる上、架空元素の虚数属性を生まれ持った魔術師。

それがどれだけ魔術的に反則的で希少な存在かは想像することさえ憚れる。

魔術協会の人間に知れ渡れば確実に封印指定を受ける羽目となるであろう。

「それと……先ほどランサーのことを”猛犬”と呼んだあたりからして、そなたはヤツが”クー・フリーン”であることを最初から知っておったのだな」

クー・フリーンとは、ケルト神話における代表的な槍使いの英雄のことである。

その名前の由来は、克蘭の猛犬。

赤枝の騎士団において最強レベルの戦士であると同時に、影の国でルーン魔術を会得したとされる一級品の英霊だ。

「心臓を必ず穿つと言われる呪いの槍の使い手を、よもやあのような方法で撃退させるとはの」

カースは呆れるように俯いた。

ブローケン・ファンタズム  
壊れた幻想などという埒外の攻撃でランサーを撤退させなかった場合、伝承通りならば反則級の宝具によって此方が大損害を受けたであろうという想像も込みで。

「まあ、込み入った話は後にしましょう。早く荷物を纏めて此処

から立ち去らねば今度は何人来るか解らない」

「事の元凶がそれを言うか。　だが今はそなたの言うとおりにしておくといったそう。　ついでに、その傷だらけの身体も治してやる」

パチッ

カースが指を鳴らすと、穂先を以ってアヴェンジャーの身体につけられた傷がたちまち癒えていく。

十中八九、治癒の魔術だ。

「感謝する、我が主」

「礼は荷物を安全な場所に運び出してからだ」

「それもそうだな。では、僕のとっておきの宝具の一つを開帳する故、荷物はそこに置いとくといい」

「それはどういう意味だ？」

マスターに問われたサーヴァントは。懐からあるものを取り出す。それは、

「この携帯端末機を使えば直ぐに」

「ちよ、待て………それ、スマートフォン？」

取り出された物は、どこをどう見ても最新型の携帯端末機のスマートフォン。

どこまで現代的な英霊なのだろうか。

最早この男が異世界人だの宇宙人だの未来人だのと言われても信じ切れそうではない。

「アヴェンジャー。そなた絶対話せよ。何時か絶対に正体明かせよ。いいな？」



「わかつている」

アヴェンジャーは携帯端末の液晶に指をタッチして滑らせていくと、二人の眼前の空間に変化が生じていく。その様子はまるで、清く澄んだ水が泉の如く湧き出すかのように、淡い光が門の役を果たす。

「さあ、早く荷物と一緒にこの中へ」

「大丈夫なのだな？」

「そうでなければこんな状況で使わない」

「そうだな。信じるでしょう」

なんかもう色々と慣れが生じたのか、カースはさっさと廃工場内に小走りに入り、休憩部屋においてあるあらかたの荷物を持って表に出てくる。

その荷物というのは、大型スーツケース一つとギターケース一つ。

「それで全部？」

「うむ」

「そうか。なら行こう」

アヴェンジャーに先導されて、荷物を手に持ったカースは淡い光の門の中に入っていった。

二人の姿が光に飲まれて消えると、それに合わせて自動的に門も消えていった。

\*\*\*\*\*

スマートフォン  
携帯端末機によって現れた光の門を潜ったアヴェンジャーとカース。  
不気味な薄暗い闇の道を通り抜けた先には、ステンドガラスの扉が  
二人を待ち受けている。

アヴェンジャーはドアノブを握って扉を開け放ち、主従まとめて神  
秘の世界へと身を投じる。

ステンドガラスの扉の向こうにあったモノ。

そこにはただ只管に静かな光景が広がっている。

「なんじゃこりゃ？」

カースは目の前にあるもの全てが非常識に感じた。

現実空間であればごく自然なものでしかないソレらを。

「驚いたか？これが僕の自慢の宝具の一つ、『セラフ霊子虚構世界』って  
わけだ」

眼前には校門があった、その先には広い校庭があった、その奥には  
校舎があった。

そして此処からは見えないが、まだまだこの空間内には他の施設が  
あることだろう。

ついでにいうと、此処が通常空間ではないことを示すかのように、  
頭上の天空には数字データが雲のように流れている。

「この宝具はかつて僕が勝ち残り生還した、とある戦いの逸話が具  
象化されたもの。まあ宝具になったことで、この一種の固有結界内  
部にある校舎その他には色んな改造が施してあるのだが。 いや

、にしても懐かしい……この月海原学園つきみはらは」

アヴェンジャーはシミジミ想い出に浸っているらしく、実に健やかに穏やかな表情となっている。

（もしや妾は、とんでもない当たりを引いたのか？しかも今、固有結界とかいいおったような・・・）

基本的なステータス値こそは若干の心配が見られたが、これだけ規格外の宝具を所有しているだけでなく、他にも多くの宝具を備えているような口振りだ。ある意味これなら今後の戦いに期待が持てそうである。

「ここは、長期的に居住・研究・調整・訓練とかが出来る巨大な工房みたいなものだ。僕以外は出入りゲートを開けられないから攻め込まれることも無い。あ、それから荷物は校舎の適当な教室にでも置いておけ」

「あ、ああ・・・」

なんと羨ましいことだろうか。

これだけ広大な敷地を工房として使用できる上、不用意に侵入者が現れることがないなど、学者肌の魔術師にとっては天国みたいな場所であろう。

大体、魔術工房というのは魔術師にとつての魔術的研究成果やそれに伴う技術が総結集された空間の事を言い、普通は無数のトラップを張り巡らせて侵入者対策をしておくものなのだ。尤も、今居るこの空間にはトラップを仕掛ける意味なんか微塵も無さそうだが。

（はてさて、これからどうするか・・・まあ一旦休息をとるにせよ、彼女が召喚されるまでは様子見に徹するべきだな・・・）

心の中でそう思考するアヴェンジャー。  
しかしこの時にも着々と、不吉な凶星が蠢いていることに未だ気付いていなかった。

\*\*\*\*\*

現実世界。

月が沈み、日の出の兆したる黎明の時刻。

深山町は殆どの住人が未だ就寝中で、町中を出歩いている者は見当たらない。

だがしかし、繁華街やビル街などがある新都は別だ。

ビジネスマン、夜遊び系の若者、或いは仕事の都合。

都市であれば、例えこの時間帯であろうと、数こそは少ないがある程度は人間が出歩いている。

カチッ

そんな哀れな子羊らを狙って、凶星が狂気の力を振るおうとしていた。

『イライラする………イライラすんぞ………』

赤と緑による毒々しい斑模様が全身に走り、『とかげ座』を宿した怪人。

リザード・ゾディアーツは、両腕と両脚に生えた鋸状のカッターを以ってして、

「いつ……！！？がああああああ！！？」

ブシューウウウウウー！！

『へへ、へへへ………やっぱスカつとするよなあ』

犠牲者等の鮮血を浴び、渴きを潤していた。

その星の衣で隠された魂を、穢れたモノで汚しながら。

\*\*\*\*\*

霊子虚構世界の月海原学園、校舎内のとある適当な教室。

その教室の一番前においてある教卓の上に、カースが持ち込んだ魔術道具や武装の類がドサつと置かれた。

「カース。先ほど言ったように、ここの敷地内を案内する」

「うむ。上手くエスコートするのだぞ」

「ふつ。僕は騎士ではなく復讐者だ。礼節を重んじる行為は苦手なのだが」

「だとしても、真似事はできるであろう？」

カースは自らの細腕をアヴェンジャーに差し出しながら、彼のことを見上げながら、試すように告げる。

「……………はあ」

アヴェンジャーは致し方ない、といった溜息を出す。  
そうして、ゆっくりとカーズの手を取ろうとしたその瞬間に、

ヴィイーン！ヴィイーン！

この上なく騒々しいサイレンの音が、赤い閃光を撒き散らしながら  
校舎 否、この空間全てに引き起こされた。  
無論、この空間は元からこんな機能があるはずが無い。アヴェン  
ジャーがこの宝具に対してなんらかの改造を施しているのだろう。

「ッ！ 予想よりも早かったな」

「な、なんじゃこの警報は！？」

「奴等が動き出したようだ」

それだけ言うと、銀髪碧眼の復讐者は、颯爽と教室から出て行き、  
1階にある保健室付近の非常口を走り抜けて校舎から出て行きある  
場所へと向った。

この空間内にあるのは校舎だけではない。校舎の近くには憩いの場  
として利用される筈の広場がある。

周囲には色取り取りの花壇、四方には木製のベンチが一つずつ、中  
心には粋な噴水を設けている円形のこの場所には一軒の荘厳な教会  
が隣接して建っているのだ。

否、もしかしたらこの広場自体が、教会の敷地なのかもしれない。

この異空間の主は迷い無く教会の扉を開けて礼拝堂の中に進んでい  
く。

在りがちなステンドグラスが鮮やかな光を演出し、信徒用が座るべき横長椅子が並べられていること以外は、虫一匹さえ存在しない、活気のなさを体現すると同時に、静寂さを具現化した礼拝堂。

その奥にあるものとは、説教壇でも祭壇でもなく、神秘とは程遠い機械の山だ。

そこにはモニターの付いた機械、キーボードと連動したコンピューター画面、メカの動きを操作・制御するボタンがギツシリと並んでいる。

現代科学の粋を集めたような物が教会の中にあるなど、歴史ある名門魔術師が見たら卒倒ものだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アヴェンジャーは教会の奥にある機械の山・・・・・・・・特に中央の台に置かれ、様々なケーブルが繋がれている物に一瞥すると、台から少し離れた教会の壁に向かって歩みだす。

無論、壁部分にも改造が施されており、ある物を四十個収めるホルダーのような形状となっている。

アヴェンジャーは収まっている四十個のうち四つを取り出して、中央の台に置かれた装置の左右に二つずつ設けられたスペースに差し込む。

〔SABER〕

〔ARCHER〕

〔LANCER〕

〔CASTER〕

金色、緑色、赤色、紫色。

それぞれ特徴的なスイッチが、装置のスイッチソケットに入り込むと、装置の中央にあるステイタスマニターが反応して音声を弾き出す。

ステイタスマニターには奇妙な強化スーツが映っており、スイッチに連動して右腕・右足・左腕・左脚部分が起動したかのように淡い光が映えている。

「おいアヴェンジャー。妾を置いて先に戦支度とは、節操がないのではないかえ？」

そこへカースが戒めるように、古風な口調で咎めの言葉を紡ぎながら教会に入ってくる。

「すまないが、説教を聞き入れる暇は無い」

しかし目の前のサーヴァントは、装置に繋がったケーブルを外していき、ピットコントロールベース純白の外装部位を無遠慮に触れて装置を手を取った。

「表で敵さんが暴れているらしい。サーヴァントではないのだが、それでも下手に犠牲者を出せば面倒事にはなる」

「サーヴァントではない面倒な敵？」

マスターの疑問詞に、サーヴァントは重々しくもキツパリと答えた。

「そう……『ゾディアーツ』だ……」



\*\*\*\*\*

新都の裏路地。

黎明の夜空は、徐々に顔を見せだした朝日の光によって眩しいものへと変わりつつある。

『アあ……………そろそろ、今日の狩りは終えだなア』

リザードは両腕と両脚に滴るほどの生き血を浴びている。

そして血を好む爬虫類の周辺には、その辺を屯していた不良達の遺骸だけが血溜りに転がっている。

チャポン……………

雫が零れ落ちる音が鈴の音のように清く鳴る。

それを耳にしたリザードは、音のした方向へと顔を向けた。

そこには、泉が湧き出るような様子を醸し出しながら、淡く優しい光の門が現出している。

「随分派手に殺したな」

「これが、ゾディアーツ……………?」

光の門を潜り抜けて現れたのは一組の男女。

男のほうは銀髪碧眼、黒い服を身に纏っている。

女の方は鮮血色の長髪で紅い瞳、黒い女物の服を着ている。

『なんだテメエらは?』

「答える道理は無い」

アヴェンジャーは切り捨てるような口調で、例の装置を身につけた。装着者の腹部に押し当てられた装置は、左右末端から鉄のベルトを伸ばして主の腰に巻きつく。

そう、あの装置の正体はベルトのバックルだったのだ。

カチカチ、カチカチ　という音を立てるようにして、スイッチソケットの下にあるレバー式のトランススイッチを指で下げてONにした。

アヴェンジャーは四つのトランススイッチをONにした直後、右手でキャプチャーハンドルを握り、左手は右斜め上へとビシッと伸ばした。

「3・・・2・・・1」

ステイタスマニターからカウントダウンが流れる。

そのカウントがゼロとなるタイミングで、彼は高らかに叫んだ。

「変身！」

ガシ、という音が鳴った。

それは彼がキャプチャーハンドルを握ってエンターレバーを勢いよく動かした音。

それと同時に、右斜め上に伸ばしていた左手は即座に左腰へと持つて行き、代わりにレバーを動かした右手を左斜め上へとビシッと伸ばした。

}}}}!!

ベルトからは軽快な音楽が響き、白い煙が周囲に噴射されていく。その中でアヴェンジャーは、足許と頭上に現れた高度で複雑な魔法陣から出でる強大な魔力に包まれていき、光が収まると同時に全ての工程が完了した。

「ッーッーッー」

カーズも、リザードも、その光景を目の当たりにして絶句した。

そこにいたのは、黒い騎士の姿。

頭为天辺から足の爪先までもを覆い隠す、華美に走ることも無骨に墮ちることもない、機能美と豪華さを絶妙なバランスで両立させた漆黒の騎士の鎧。

兜は血塗れたように紅いバイザーが光を齎し、額には紫のシグナルが小さく煌いていた。

大きな背には星屑を鏤めたかのような見事極まる銀色のマントが着けられ、風に靡いて優雅な画を築いている。

そして、右腕には金色の円形<sup>サイクル</sup>、右足には緑色のバツ<sup>クロス</sup>、左脚には赤い三角<sup>トライ</sup>、左腕には紫の四角<sup>スクエア</sup>があった。

漆黒の騎士は、全身に力を漲らせ、両の拳を握る。

そうして、黒い騎士は左の拳を腰元に、右の拳を天上に向け放って声を張り上げる。

「幻想キタゼえー！ー！ー！」

ろくな物音さえ無いこの静まり返った時間帯において、その気合充分な台詞は新都中に響き渡った。

『き、貴様は……!?!?』

リザードは思わず、目の前に現れた存在に問う。

かの者は天上に向けた拳を下ろし、今度はリザードに向けて熱い声音でこう名乗る。

「仮面ライダーファズム！」

今この瞬間、幻想戦士が現代に甦った！

黒い幻想戦士は、主の方へ少し顔を見せ、

「見ている、カース。あんたが召喚せしめたサーヴァントの力を」「うむ。汝の力、我が勝利の為に役立てておくれ」

その時、カースは己がサーヴァントの真価の一端を知った。

令呪を宿すマスターには、サーヴァントを視認することでパラメータを読み取る能力が与えられている。自身が従えているサーヴァントとなれば、基本パラメータはおろか能力スキルさえも判別可能だ。

そして今のアヴェンジャーはスペックは変身前とは比べようもなくパワーアップしている。

身体能力にまつわる三つのパラメータは全てDランク判定だったのに対し、変身完了時には三つのパラメータがAやBにまで上昇している。

「ミッションスタートだ！」

ファズムは拳を今一度リザードに向けて決め台詞を言い放つ。

「ハッ！」

『くっ！』

敵目掛けて一直線に突っ込んでいったファズムは、そのまま勢い任せと言わんばかりに、リザードに体当たりして路地裏から飛び出した。

幸い、時間帯的に人通りは全くといって良いほど無いし、何より皮肉なことに、リザードの間引きによってそれは拍車をかけていた。

ブン、という風を切る音がすると、ゴツという鈍い音が聞こえる。拳や蹴りが敵に当たる音だ。

「セイっ！」

『があッ！』

リザードもリザードで、両腕についているノコギリ状の刃で応戦する。

ズイガ、という金属を無理矢理切り裂くような不愉快な音が生まれた。

「ん……………っ」

軽いダメージに少しだけ声を漏らすファズム。

しかし、動きには何の影響も及ぼさない。

ファズムは右端のソケットにあるスイッチを押した。

〔<sup>セイバー</sup>SABER・<sup>オン</sup>ON〕

無機質な機械音が静かに発せられると、彼の右腕にはある武器が  
マテリアライズ  
実体化して装着された。

それはこの薄暗闇でさえ輝きを損なわない黄金の巨大な両刃剣。

右前腕部をスツポリと覆い隠すようにして装着されたそれは、神秘  
なる宇宙の力を秘めたアストロスイッチのNo.1 セイバーモ  
ジュールだ。

「空中散歩に付き合っつて貰うぞ」

『なに？』

ブオオオオオオオオオオオ！！

一瞬にして、セイバモジュールが火を噴いた。

正確に言うと、セイバモジュールの柄部分全体から多大な魔力が  
放出されてジェットエンジンの役目を果たしているのだ。

まるでロケットのような推進力を得たファズムは、そのまま体の力  
を抜いて空を飛んだ。

切っ先を以ってして、リザードの腹を突き刺しながら。

『がつくつ……ぎ、ザ……！！』

ファズムが空へと飛び立つ直前での軌道上、そこにはリザードがい  
た。

まあファズムが意図的にそうなるよう助走をつけたり、切っ先を設  
定したのが最大の理由だが。

兎にも角にも、今のファズムは新都の上空を荒々しくも縦横無尽に

飛びまわっている。

アストロスイッチに内にある魔力エネルギを用いての乱雑な飛行。

それを切っ先で腹を突き刺されながら味あわされているリザードの苦痛は相当なものである。

だがその状態を何時までも繰り返すわけにも行かない。

ファズムは一気に急降下して右腕を振るい、無理矢理にリザードを地上へと叩き落した。

『へぶっ………!!』

無様な声を漏らしながら地面に激突するリザード。

「ぶっ」

肩やファズムはクールな様子で優雅に地上へと降り、スイッチを切つてモジュールを消失させる。

『じんのぉ………!!』

リザードは憎悪に満ちた声音を轟かせながら立ち上がり、溢れんばかりの殺気をファズムに向けている。

更に言うと、セイバーモジュールによってつけられた腹部の傷も、みるみる治っていくではないか。

「ヤモリやイモリの自己再生は聞いた事があるが、どうやらトカゲは尻尾以外にもある程度は出来たらしい」

ファズムは涼しい態度で観察する。

だがその間にも、スイッチを入れている。

「ARCHER・ON」  
アーチャー  
オン

今度は右足に緑色のユニットが装着された。

そのユニットはまるでボウガンをより機械的で巨大にした感じのものだ。

その証拠に、弦と弓に当たる部分には、5本の大きな金属矢がセツトされている。

パチっ

鳴らされた指の音。

それを合図にして、

ビュビュビュビュン！！

アーチャーモジュールから5本の大きな金属矢が発射された。

『こんなモノ！』

リザードは獣じみた俊敏さで、即座に5本の矢を避けた。

しかしそんな行動に意味は無かった。

なぜならアーチャーモジュールは、

グサッ

ホーミング  
追尾機能の付いているからだ。

しかも発射された金属矢の鏃には全て、

『ん、あ………なん、だよ………から、だが!?!』





着する。  
そして、

ガシッ

ファズムは空中でエンターレバーを作動させる。

現状態でのそれはつまり、システムに対し必殺技発動の許可を示していた。

〔S A B E R ・ L A N C E R : L I M I T リミット B R E A K ブレイク〕

電子音が必殺技発動のコールを打ち出すと、セイバーモジュールの魔力放出は輪をかけて勢いを倍増させ、ランサーモジュールの穂先は大気中の魔力を根こそぎ奪って最大出力での稼動を始める。

「貫けッ」

ファズムは渾身の力をこの一撃に託す。

「セイバーランサーキーーック!!!」

上空から降り注ぐ一筋シューティング・スターの流れ星。

それは魔力によって発生した光の尾を引きながら直進する魂の一撃だ。

金の剣によって突き進み、赤い槍はりザードの胸部へとその刃を突き刺した。  
そして、

ズバァーッ!

リザード・ゾディアーツは貫かれた。  
ファズムはというと、

ガリガリガリガリッ！！

リザード一体分では殺しきれなかった勢いを止めようと、ランサーモジュールを地面に突き刺し、上述の擬音通りにアスファルトを一字型に削りながら減速していく。

15m程の距離によって減速し終えて動きが止まると、ファズムは本物の騎士のように優雅な仕草を取った。

『ぐあああああああ！！』

その後ろで怒るリザードの悲鳴と爆発が、なんともいえない雰囲気を出していた。

「闇に埋もれて散れ」

ファズムは静かに、呟くように、決め台詞を口にした。

その一部始終を見届けたカーズは、両の瞳に純粹な感情をはめ込ませると同時に煌かせていた。

「これが、妾のサーヴァントの力……！！」

その時に彼女は確信に近い感覚で思った。  
この戦い、確実に勝ち抜けると。

「うあ……く、そ……」

なお、リザードに変身していた男は未だに息があつた。もつとも、さっきの戦いで全身はズタボロの血塗れで、処置が遅ければ確実にお陀仏になるであろう程の重症ぶり。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ファズムは無言のまま、リザードだった粗暴そうな若者に近寄る。だがそれは違う。

ファズムが用があるのは、彼が使っていたゾディアーツスイッチだ。ファズムのものと違い、黒と銀で彩られ、ドーム状の部位の天辺には赤いボタンがある。それがゾディアーツスイッチに共通する特徴。

「まだ”ラスト・ワン”には達していなかったらしいな」

それだけというとファズムはゾディアーツスイッチを若者の手から強制的に奪い取り、生涯における怨敵を見つけたかのようなドス黒い視線をスイッチに向ける。

カチ、という小気味良い音がすると、ゾディアーツスイッチは超小規模なブラックホールの彼方へ飲み込まれたかのように消滅した。

「アヴェンジャー。この男はどうする？」

「放って置く」

ファズムは一言で若者を見限った。

四つのトランススイッチを同時に上げること、変身を解きながら。

「それより、召喚初日で暴れすぎた。ランサー以外の輩が来る前に、

さっさと退散しよう」

「……………わかった。確かにこれ以上の消耗はさけるべきじゃな」

二度に渡る戦闘を行ったのだから、アヴェンジャーの言い分に一理有ると判断したカースは、素直にその言葉を聞き入れることにした。

(それにしても、少しばかり、立場が逆なような……………)

言われて見れば、カースはアヴェンジャーに対して命令らしい命令をしていない。

今までの行動の殆どが、従者が自発的にやったことばかりだ。

(こ奴のペースに呑まれておった言うのに、何故こうも悪くない気分になるのやら……………)

しかし、カースはその事に対して特に反発や嫌悪の思いを抱くことさえなかった。

(それに、あの男からは妾と同じく……………亡者どもの怨念を感じてならん)

寧ろ、同族じみた臭いさえ嗅ぎ取っていた。

魔術師として血に染まるどころか、血の海に浸かり続けたカースの一族と比較できる程の強烈な死霊どもの怨念を。

そうして戦いを終え、アヴェンジャーの腕輪と指輪は、地平線より光を漏らす朝日に反射して金銀の小さい輝きを以って色めいていた。

\*\*\*\*\*

『報告は以上にてございます』

どことも知れない部屋。

まるで大富豪や王侯貴族の屋敷の豪華さを連想させる部屋で、クロークを纏った異形は敬語で誰かに報告を行っていた。

「なるほど。ファズムがこの時代に」

それを聞いていたのは一人の女。

青黒い扇情的なイブニングドレスを着ていて、万人を魅了する究極の美貌と悩ましげなプロポーションを併せ持った、金髪紅眼の女だ。

その報告を耳にして、彼女は瞳を金色にしながら嬉々として笑っていた。

この先の未来で起こりうる、混沌たるモノに思いを馳せながら。

こうして、異端なる八番目のサーヴァントとマスターにおける、第五次聖杯戦争が幕を開いた。

召・喚・変・身（後書き）

次回、仮面ライダーファズム！

剣・士・召・喚

英雄スィッチ・オン！

## 剣・士・召・喚

夜明け頃となり、日の光が差し込みだした冬木市の新都。都市化が日々進むこの町の路地裏に、一組の男女が居た。

片方は銀髪碧眼の青年、片方は赤髪紅眼の女性。

青年の呼称名は、アヴェンジャー。女性の名称は、カース。

万能の願望機『聖杯』を巡って七人の魔術師と七人の英霊によって行われる『聖杯戦争』に参加している二人は、たった今サーヴァントや魔術要素とは関係ない敵との戦いを終えていた。

「アヴェンジャーよ。戦いは終わったというのに、なぜ門を開けぬ？あちらの世界で休もうと言ったのはそなたではないか」

「そうは言ったが、その前に探しておきたい人物がいる。今後の戦いは勿論のこと」

アヴェンジャーは明るくなりだした町中を歩き回りながら、何かを懸命に探している。

「戦後処理に役立ちそうな奴がね」

より都合よく展開を進めるために……………。

「戦後処理じゃと？聖杯戦争が終わった後のことか？」

「ああ。この第五次聖杯戦争は、色々込み入ったことになっているからな。生き残ったとしても、我々の立場が揺らく事態は避けたいのでね」

「……………そなたの言動は先ほどから要領を掴めぬ。まるで、



未来を知っておるような口ぶりだ」

「ほう。もしそうだと言った場合はどうする？」

アヴェンジャーは一度歩みを止めて質問する。

カーズは答え辛そうに俯いたり唸ったりしている。

「……………別に」

一言、素っ気無さそうに言ったが、

「ただ、マスターである妾には、隠し事はして欲しくないと思っただけじゃ」

最後にどこか哀しそうで儂げな表情。

「……………すまない」

そんな主人の顔を見て、憐れな復讐者は虚しい謝罪を口にした。

なんとも居た堪らない雰囲気蔓延しつつある状況で、二人は再び足を動かして歩き出す。

会話らしい会話など、さっきの会話の所為で完璧に話し出すタイミングさえ全て挫かれたようで、主従そろって溜息一つだす気にもならない。

そのくせ空気だけは時間の経過と共に重くなって行き、より一層話しかけることが難しくなるという悪循環振り。

アヴェンジャーもカーズも、さっさと何かを発見して陣地に戻らねばなるまい、と強く思う。

爽やかな朝日とは裏腹に痛々しいモードが続きかねない二人が黙々

と町中を散策していると、お目当ての人物を探し当てることが出来た。

まあ尤も、探し当てた場所で彼女は文字通り死に体も同然の状態となっていた。

「アヴェンジャー。よもや……」

「間違いない」

アヴェンジャーが搜索していた人物は、

「……あ、貴方……た、ち、は……」

視力さえまともに働いてないことを示すような、眼の焦点が合っていない上に瞳孔が開きかけている眼球で尚、必死に自分に近づいてきた者を見ようとしている。

服装は男物のスーツ姿で男装をした赤髪の麗人で、体のある部分から多くの血液が流れ出し、今となっては立って歩くことさえ叶わぬほどに消耗していた。

「これは、酷いのう……まさか腕ごととは……」

カースは表情を魔術師のそれに切り替え、冷静な顔つきで麗人の状態を見る。

「兎にも角にも、今は彼女を治療することが先決だ。令呪を左腕ごと奪い取られて尚ここまでもったことさえ奇蹟的だからな」

アヴェンジャーは男装の麗人の体を抱えると、すぐさま淡い光の

門』を開いた。

(サーヴァント………？なぜ味方でもない元マスターを………？)

当たり前の疑問を抱きつつ、彼女はその意識を優しい闇の中へと落として行った。

彼女の名はアイルランド出身の魔術師にして封印指定の執行者。  
ゴッズ・ホルダー  
伝承保菌者のバゼット・フラガ・マクレミッツ。

そして　　ランサーの元マスター。

\*\*\*\*\*

## Interlude

何処とも知れぬ豪華な部屋の中。

そこには例の「金色の瞳の女」と、クロークを纏ったゾディアーツが向かい合っていた。

『如何なさいますか？』

「そのリザードに選ばれたものは、まだ生きている？」

『重症を負い、病院に搬送されています』

「フフフ………。だったらまだ使い道はある」

女は目の前のゾディアーツに命じた。  
懐から一つのスイッチを取り出しながら。

「今一度、星の運命を与えよ」  
『御意』

クロークを纏ったゾディアーツは、女の手からスイッチを受け取り、  
部屋から消えていった。

もう一度、歪な星の光と宇宙の間を齎すべく、星座の力が動き出す。

\*\*\*\*\*

謎のサーヴァント・アヴェンジャーが所有する宝具の一つ、『ラウ霊子  
虚構世界』。

主とその仲間以外の余分な存在よつそを受け入れない一種の固有結界の内  
部に建てられた偽りの校舎、月海原学園。

夜明け頃に拾われた重傷患者は、一階の保健室のベッドに寝かされ  
ていた。

ただし、この部屋においてもアヴェンジャーによる改造は施されて  
いた。

カタカタ、というキーボードを叩く音が聞こえてくる。

十本の指が的確に、迷い無く動き、ベッドの直ぐ傍においてあるノ  
ートPC状の機械に何かしらの命令が入力されている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・よし。応急処置も済んだ」

アヴェンジャーが一安心といった表情で、キーボード入力を完了する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

一方、保健室の椅子に座って机に向って溜息を吐いているのは魔術師のカーズ。

「どうかしたかマスター？何か不服な点でも？」

「不服ではないが、とことんそなたは機械慣れしておるのだな」

「まあ、生前の経験上でね」

アヴェンジャーは苦笑いしながら答えるも、カーズの表情は曇っている。

バゼットが眠っている保健室のベッド、その改造具合が余りにも科学的だ。

ベッドの周辺には大病院で使われていそうな医療機器が置かれており、その医療機器とノートPCはケーブルを通して繋がっているのだ。

そして医療機器からは輸血用のチューブがバゼットの体に伸びていて、赤々とした血液を彼女の体内に流し込んでいる。

他の事柄についてはカーズが治癒魔術をかけて傷を塞いだが、切断された左腕についてはどうしようもなく、包帯が十重二十重に巻きつけられているだけ。

「もはや真名を明かす程度では、そなたの素性を知るのは無理とし

か思えん」

「ま、ある意味そうかもしれないな」

アヴェンジャーは立ち上がってカースに近寄ると、真剣な顔つきでこう述べた。

「さてマスター。取り合えず今は……………」

漸く聖杯戦争の指針に話題を移ると思つてカースも固唾を呑んで聞こうとする。

だが、

「外食を兼ねて物資の買出しに行くでしょう」

「……………はい？」

なんか、カースの時間が可笑しなことになった。

固有時制御を使つたわけでもないのに、自分の周りの時間が早くなつたり遅くなつたり　　そんな感覚を味わつた後、

「なんじゃそれはあああああ!!？」

呪詛の名を冠する一人の魔術師の雄叫びが、全人口が三名しか居ないがらんどつの世界で小気味よく響いたのであった。

「なんじゃそれはって、ここで生活する以上日用品は必要だろうし、何か食べねば栄養補給は出来ん。それに深山町の商店街には僕一押し中華飯店がある」

「それ完全にそなたの私情が半分近く練りこまれておるではないか！それ以前に、なんでこの町の中華飯店なんぞを知っている!？」

繰り出される渾身のツッコミの嵐。

しかしアヴェンジャーはそんなツッコミに大して気にする様子は無く、「まあまあ」と宥めにかかってくる。

「それについては例に従ってスルーしてくれ。 兎にも角にも、フラガの魔術師が此処にいる以上、僕達がランサーとの交渉手段を得たという事実は変え難いのだから」

その言葉を聞いて、カースの表情が一変する。

「ランサーとの、交渉手段？」

「ああ。彼女が早め<sup>バゼット</sup>に眼を覚ませば、ランサーを此方側に引き込めるかもしれないってことさ」

\*\*\*\*\*

時は常に、万物に対して平等に動いている。

いつも一方通行で、進むことはあっても、止まることも戻ることも無い。

だからこそ、時間という概念が成立し、地球は自転することで太陽も東から西へと移動していくように見えるのだ。

まあ御託はこの辺にしておいて、現在時刻は昼間の12時前後。

学生や社会人達が弁当やら食堂やら飲食店のお世話になる時間帯だ。それは冬木のマウント深山商店街であろうと例外ではない。

そして、

「いやあ、買った買った」

「まあ、久しぶりに思う存分買い物できて楽しかったのう」

八番目の主従といえど例外ではなかったらしい。

日用品のみならず、魔術に使う薬品や道具も買い込んだようで、当初の予想より荷物が若干多くなっている。

「買い物はこれで終了。次は中華飯店で食事じゃったな」

「紅州宴歳館、泰山。一見さんは逃げ帰ること間違いなしの激辛専門店だ」

そう。泰山はその名の通り、地獄の閻魔大王が舌を引っっこ抜くような半端ないにも程のある激辛中華料理で名が知れているのだ。それらの味を修行して身につけたという小柄な女性店長の中国人こと魅<sup>バグ</sup>は、獄卒だとか言われているくらいのレベルなのだ。

せめて甘酢あんかけ系などをさっさと頼まねば、色んなメニューが高速で繰り出されてしまう。

チンジャオやホイコーローでさえ目も当てられないというのに、麻婆豆腐なんぞを頼めば、初見さんは確実に三途の川原を下見する羽目とかす。

名前の通り泰山は、この商店街における魔窟なのだ！

「こんにちわ」

「ど、どうも……」

至極平凡な挨拶をしながら店内に入る。

尤も、カースは妙にたどたどしい態度となっているわけだが。



「初見さんいらっしやいアル！」

小柄な外見にピッタリ似合う美少女ボイスが聞こえてきた。

店内の厨房で十字鍋を巧みに扱う姿は紛れも無く店長の魅だ。

しかしながら、アヴェンジャーとカースにとって、店長以上に注目すべき存在が居た。

それは……………。

カチャカチャ、パクパク

額に汗しながら片手にはレンゲを持って平皿の中で煮えたぎった料理を素早く口へと放り込んでいく長身の男。

一言で述べると、神父がマーボーを食っていた。

「……………えーと」

「……………注文、するか」

何時までも突っ立っているのもアレなので、

「店長。麻婆豆腐とラーメンを頼む」

注文を済ませて早速席に座る二人。

当然、その近くにはパクパクとマーボーを食べる神父が、一心不乱にレンゲと口を動かしている。

「……………」

重苦しい視線が交差する。

「あの………一つ訊ねるが」

とここで、カースが口を開いた。

「ことみねぎれい言峰綺礼神父で、相違ないか？」  
「ふむ………」

言峰は肯定を意味する首肯をしながら、皿に残る二口分のマーボ―をどんどん口へと放り込んで租借していった。  
つまりは完食し終えたということである

「イレギュラークラスのサーヴァント・アヴェンジャーと、そのマスターか」

言峰はレンゲを一旦置き、重苦しい視線をキープしながら二人を見る。  
やる。

「うむ。まさかこのようなタイミングで、しかもこのような場所で会えるとは思わなんだ」

聖杯戦争を参加するとなれば、聖堂教会から派遣される監督役の神父のことくらいは調べてあるカース。

だがその神父がマーボ―好きなどとは夢にも思っまい。

「まあ良いのではないかマスター？食事ついでに下らない報告とやらも済ませられる」

アヴェンジャーは初っ端から言峰に対して敵意全開の視線をぶついている。

「ふっ、会ってまだ三分と経たぬうちに嫌悪の視線を向けてくるとは、不躰なサーヴァントもいたものだ」

「人様から嫌われる要因ならあんた自身、自覚くらいしてるのではないか？」

「これこれ、二人共よさんか。食事の席で胸糞の悪くなる会話を交わすな」

険悪なムードが漂いそうなところを、カースが間に入って塞き止めた。

「………まあいい。今回は参加登録の報告、それだけにしておくとしよう」

「よかろう。聖杯戦争の監督役として、君達二人の参加を受理しよう」

「うむ。では込み入った話は一旦脇にでも寄せて………」

そう。

そもそもアヴェンジャーとカースが此処に来たのは、

「アイ。マーボー豆腐とラーメン、お待たせアル！」

この激辛料理を食べる為である。

「うんうん。この匂い」

「うわッ、辛そう………」

置かれたマーボーを見て満足そうに頷くアヴェンジャーと、煮え滾

らんばかりのソレに引き気味のカーズ。

「それから、マーボー追加もお待たせアルよ！」

「ふむ」

そして、おかわりの激辛マーボーをレンゲで食わんとする神父であった。

\*\*\*\*\*

冬木市・新都の病院。  
とある個室の病室に、彼は居た。

顔には絆創膏、体には何重もの包帯が巻かれている重体ぶり。  
今朝方になって発見され、つい先ほどまで集中治療室で緊急手術を受けていた男。

「く、そ……………」

ろくに動かない身体で、男は怨嗟の声を掠めさせつつ吐き出した。

「あの、黒い奴……………！」

リザードの変身者である。

常識を超えた力を思う存分に振るい、悦に入っていたところを、同じようにスイッチの力を宿した謎の戦士に倒されてしまい、拳句の

果てにゾディーツスイッチを失った。

「殺す………ぜってえ殺す………」

今の男の精神は、ファズムへの憎悪で満ち満ちている。

『中々の殺意だな。結構なことだ』

「ッ」

聞こえてきた謎の声。

それは男に力を与えた者の声。

「あ、あんたは、あの時の！」

『くつくつく』

病室の窓の鍵を念動力のようなもので外し、容易く室内に侵入してくる異形。

クロークで隠された身体からは、神秘的な星座の光が刻まれている。

『その殺意を買って、君に最後のチャンスをくれてやる』

ゾディーツはクロークから、一個のスイッチを取り出し、男に差し出す。

『受け取るがいい。そして、全てを奇蹟に託せ』

「」

断る道理は無かった。

男はベッドから状態を起こし、ゾディーツの手から乱暴な手付きでスイッチを握りとる。

その瞬間、男の手である現象が起こった。

〔LAST ONE〕  
ラストワン

暗く沈んだ音声が鼓膜に伝わると、スイッチの外観が変化を起こしたのだ。

所々にトゲが生え、ドーム部分は充血した目玉のようになったおぞましい形状に。

『おお、調整したスイッチとはいえ、すぐさま効果が現れるとは・・・  
・・・やはり見立てに違いは無かったらしい』

『よく解らんが、これを使えばあの野郎をブチ殺せるんだよな？』

『ああ勿論だ。尤も、人の身を捨てねばならんがな』

「ケツ 上等だな」

カチッ

そうして、男は星座の光を纏い、とかげ座のリザード・ゾディアーツと化した。

しかし、変身が完了したと同時に、本体と言える肉体が白い繭で包まれた抜け殻として排出されたのだ。

言葉通り、男はこの瞬間、ヒトを捨てた。

\*\*\*\*\*

中華料理飯店・泰山。

昼過ぎとなった店内はというと……。

「あああ……無理、もう無理……」

カースが激辛ラーメンを食い終わったことは食い終わったのだが、意地になって食べた所為で口の中がもう大変なことになっていた。最早、「ううう」といった呻き声しか出そうに無い。

そんな彼女を見て言峰は、くくく、という笑いを零していた。

「あちゃー、やはり初心者にはまだ早かった」

アヴェンジャーはアヴェンジャーで、マーボをきっちり食べ終えていた。

しかもカースの容態までみる余裕さえある。

「くくく、思いのほか楽しませてもらったよ、魔術師カース」

言峰は言峰で、半笑いのまま嫌味とも感謝とも採れることを言っている。

因みにこっちは額に汗しながらもマーボを平らげた。

(やばい。この二人もやばいが、この店も相当やばいぞ)

殺人的レベルの一手手前の激辛ぶり。

カースは必死にコップの水を口へと流し込んでいく。

「は、やく……出よう……」

「はいはい。店長、お勘定だ」

「では私も」

食事終了につき、三人は料金を支払って店から出て行く。

この時カースには、激辛料理に対する軽度のトラウマが出来たことも記しておこう。

「情けないな、我が主よ。あの程度のレベルで音を上げるとは」

「そなたと神父の味覚が異常なのだッ！」

「そうか？上手いのだが……なあ神父？」

「ああ、全くだな」

なんか妙に意気投合している辛党コンビ。

「知るか！なんでも良いから早く教会に戻れ、このマーボー神父が！」

「そこまで言うのなら戻るとしよう。面白いものを見せてもらった礼だ」

と言い残して、言峰は足早に冬木教会のある方向へと歩いていった。アヴェンジャーとカースはその反対方向に歩いていく。

だがしかし、言峰と分かれてから数分後、カースはまたしても重大なことに気がついた。

「のうアヴェンジャー。仮にもサーヴァントであるそなたがどうして外食しようなどと言いだしたのだ？妾からの魔力供給は充分適っている筈だが」

「ただの気分、と言っておくべきだな」

アヴェンジャーはさらりと言った。



しかし、カースの疑問はそれだけではない。

「ではもう一つ。なぜ実体化を解いて霊体化せんのだ？」

「それは簡単な話だ。僕は霊体化が出来ない不完全なサーヴァントだからだ」

「・・・・・・・・・・な・・・・・・・・・・に？」

とんでもない新事実が発掘されてしまった。

「まあ心配するな。こう見えても僕の保有スキルの中には『単独行動：A+』がある。宝具や魔術を使わない限り、日常生活を送る分には魔力を消費しない」

などと、安心させる要素を添えておくアヴェンジャーだが、マスターからしてみれば無視しきれない情報だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カースは少しばかり絶句すると、

「妾は一体、どこで間違えた？」

もう既に手遅れなことを問い質すのであった。

\*\*\*\*\*

同時刻、リザード・ゾディアーツはとある場所にやってきていた。アヴェンジャーに対する報復を行うには、向こうからやって来させるしかない。ならば簡単。

こつちで大騒動を起こせばいいのだ。

それに打って付けなのは、多くの人間が集まっている場所。

『(さて、殺戮タイムの始まりだなあ！)』

ザシユ！ザシユ！

「ぐっ、ぎゃあああああ！！」

「うわああああああ！！」

新都のと真ん中である。

\*\*\*\*\*

『テラフ霊子虚構世界』内部の月海原学園の校舎内。

購入した物品・道具・薬品を適当な教室の教卓に置いた主従。

もつとも、先ほどの激辛料理のみならず、霊体化できないという驚愕の事実を暴露した所為だろうか

「おい、マスター」

「ふっ………！」

カースはさっきからこんな風に不貞腐れている。だがそんな一見平和じみた時間も一発で弾け飛ぶこととなる。

ヴィイイイイン！！ヴィイイイイン！！

「っ、ゾディアーツ！」

「また奴さんかっ？」

鳴り響く警報。

アヴェンジャーは鬼気迫った表情となり、カースはぎよつとした表情となる。

「まだ日が高いというのに、此方都合などまるで考えていないようだな」

「しかし行くのであろう？」

「………ああ。このままでは死人が増える」

アヴェンジャーはそう言って教室から出て行く。

無論、マスターであるカースもついていくべきなのだが、

「妾はここで待機してある」

「理由は？」

「真昼間からサーヴァントが戦っただけで目立つというのに、そこへマスターまでもがのうのうと佇んでいたらどうなると思うのじゃ？」

そりゃ完全に他の陣営に対して、狙っこらてください、と言ってるまじなものだろう。

「了解した。では言ってくる」  
「うむ。頼んだぞ、ファズム」

\*\*\*\*\*

冬木市・新都。

『へへへ……餌撒きと暇潰しのつもりだったが、こりゃ楽しくなつてきちまつたぞおオイ』

周囲に十数人ばかりの男女の亡骸に囲まれ、リザードの身体も、地面も全て、真っ赤な鮮血で染まっている。  
アヴェンジャーを誘き寄せ余興のつもりだったが、ここまでやる  
とリザードの殺人衝動が再び湧き上がってくる。

そこへ、

チャポン

清澄なる雫の音が入ってきた。

『おうおう……漸くお出ましか』

「血の臭いが濃すぎる……。スイッチをやったというのに、ラストワン形態になってリベンジを挑むとはな」

『やられた分の借りはきっちり返す主義でな。そのチャンスをくれ

たマント野郎には感謝してる』

「チツ あいつら、やはりこの時代に来ていたか。……いや、そうでなければ英霊になった甲斐が無いというべきか」

アヴェンジャーは「光の門」から現れ出でると、目の前の惨状と、未だ姿を晒さぬ敵を思い、片手を顔に当てながら溜息をつく。

『ゴチャゴチャほざいてねえで、さっさと変身しろ！』  
「煩い野郎だな」

アヴェンジャーは早速、手中にファズムドライバーを出現させて装着した。  
四つのトランススイッチを入れて、エンターレバーを握り締め、腕を構える。

「3・・・2・・・1」

カウント・ダウン !

「変身！」

そして、

~~~~~

煌びやかな星屑のマントを風に靡かせ、漆黒の鎧は陽光で眩く輝き、真紅の双眸が敵を射抜く雄々しき騎士の姿へと変わる。

「幻想キタぜえー！ー！！」

右手を大きく天に向けて突き出し、幻想の騎士は宇宙に向けて叫んだ。

「いくぞ、蜥蜴ヤロウ」

幻想の騎士、ファズムは腕を下ろすと同時に、眼前の敵を指差す。

「ミッションスタートだ！」

一連の決め台詞を述べ終わると、ファズムは即刻リザードに突撃していく。

今のファズムは両手両脚に何も装備していない徒手空拳の状態だ。だがファズムの武器がモジュールだけというわけではない。

「Es flüster 声は祈りに  
t hauser ab 大地を削る Mein Nagel reis 私の指は

口より紡がれた詠唱。

発動するのは、アヴェンジャーが生まれ持った虚数属性の魔術。

魔力を刃へと変えるソレは、リザードの身体に直撃した。

ファズムはそこへ追撃するように、さらに唱えた。

「Satz 志を確に Mein Blut 私の影は  
nvasionen 剣を振るつ widerstent I

追加される影の刃。

その数は先ほどと合わせて何十に及ぶ。

『じいつツ、舐めるな!』

リザードの身体には幾重もの傷が付けられた。

しかし、爬虫類特有の再生能力により、その傷とて約十秒で回復した。

『小細工やりやがって』

「小細工、か。じゃあもつと見てみるか？」

ファズムは挑発しながら、スイッチソケットの左端に収まっているスイッチを起動させる。

〔CASTER・ON〕

そうして左腕に実体化して装着されたのは、神秘と幻想を凝縮させたかのような美しい結晶石を搭載した錫杖型のモジュール。

紫の錫杖に収まった結晶石には凄まじい純度と量の魔力が内包されているようで、

「現れ出でよ! 『マシンストレイダー』……………! 『ブルーバスター』……………!」

ファズムがキャスターモジュールを天に向けて叫んだ瞬間、

『な、なんだツ!?!』

突如ファズムの背後に二つの大きな光の柱が立ち込めたのだ。鮮やかな青い光と、儚げな紫の光は、徐々に消えていく。

『んな……バイクと、戦車だと!?!』

リザードは余りに有り得ない光景に仰天した。

彼自身コズミックエナジーという常識外の力を得ているが、目の前の現象は宇宙の神秘のみならず、幻想の神秘さえも用いた奇蹟が実演されている。

青い光の柱から出てきたのは、蒼銀を主軸とした巨大な車体に白いストライプが描かれ、一本の砲身が真正面に向って立派に伸びている戦車。

紫の光の柱から出てきたのは、闇色に塗りつぶされた車体の一部に紫のトライバル柄パターンが描かれたシャープなオートバイ。

「ラストワンになった君を地上<sup>ニヒ</sup>で仕留めようものなら、被害は拡大するのでな。どうせなら地球全体を一望できる場所で消えてもらおう」

『なにワケわかんねえこと言ってやがる!』

リザードは両手の構えて、両脚の力を込めて一気に駆け出し、ファズムの喉元に喰らいつかん勢いで駆けた。

が、

「シャドー・オン  
投影開始」

ツツ!!

『うが………!!?!?』

たった一言、その一言が発せられただけで、リザードの動きは完全



に封じられた。

理由は単純　リザードの頭上に、巨大な岩の斧剣が姿を見せ、重  
力と自重に従い、強烈な重石となったのだ。

「これだけのものだ。いかなゾディアーツとはいえ、幾ばくかは足  
止めできる」

そうして、マシンストレイダーに跨ると、ハンドルを握ってアクセ  
ルを全開にした。

ブウウウウウウーン！！

マシンストレイダーのエンジンを轟かせながら、ファズムはバイク  
を巧みに操り、ブルバスターの車体の上部目掛けて跳躍させる。

「MACHINE SET」  
マシン  
セット

すると、バイクの車輪が戦車上部に備え付けられていた機械によっ  
て固定されたのだ。

「シャドー・オフ  
投影破棄」

言葉と共に、巨大な岩の斧剣がフツと消失した。

リザードは安堵の思いを感じると同時に逃げようとしたがもう遅い。

「主砲、放て」

ズドンズドンズドンズドンズドンツッ！！

ファズムの下知を受けて、ブルバスターの砲身から数発の砲撃が発

射され、

『ぐおおあああああああ！！』

這い蹲らされているリザードに直撃

ビュンビュンビュンビュンビュン！！

『があああああああ！！』

さらには車体から小型ミサイルが十発ほど一斉掃射され、リザードの身体を空中に吹っ飛ばしていく。

ガシヤ、ガシヤ！

〔TタワーOWER MモードODE〕

それに合わせてブルーバスターも、戦車型のタンクモードから変形していき、ロケットを打ち上げる発射台型のタワーモードとなったのだ。

〔RレディEADY〕

変型が完了し、

〔3・・・2・・・1 BラストLAST OオフFF〕

ジユドオオオオオオオオオ！！！！

「行つくぜエエエー！！」

マシンストレイダーとブルーバスターという二つの騎乗用宝具の力により、ファズムは上空へとぶっ飛んでいったのだ！

ブルーバスターという発射台から供給されて強化された魔力をエネルギー一気に爆発させ、マシンストレイダーのエンジンから吹き荒れる白煙の量は、本物の宇宙ロケットの打ち上げを連想させるに値した。

「オオオオオオオオオオっ！！！」

『グアアっ！！？』

天空に向けて一直線に飛んでいく一台のバイクは、軌道上に存在するリザードさえも巻き込んで、共に雲をつきぬけ、大気圏を貫いていく。

しかもそれに掛かった時間は二分足らず　　速度にしてマッハの領域にもなる。

とどのつまり、ファズムとリザードは、宇宙空間に飛び出したのだ。地球の重力を振り切り、水も空気もない場所へと敵を追い詰めたファズム。

『こ、これは……………！？』

不慣れな無重力状態に手足をバタつかせているリザード。  
倒すならば今が正に好機である！

「トオッ」

ファズムはバイクを乗り捨てると、すぐさま他のスイッチを起動させた。

〔SABER・ON〕

〔LANCER・ON〕

右腕には黄金の大剣、左足には真紅の大槍。  
そして、

ガシャン

〔SABER・LANCER・CASTER・LIMIT BRE  
AK〕

セイバーモジュールからは止め処もなく魔力が噴射され、ランサーモジュールからは禍々しい魔力が渦巻いていく。

ファズムは左足を突き出した蹴りの体制で、青く輝く霊長の母星を背に叫んだ！

「セイバーランサー宇宙キーーーック！！！！！」

ズガガガガガガガ………ツ！！

重力に縛られていて地上とは異なり、無重力空間であるこの場であれば、ありとあらゆる衝撃が数倍となる。

それはつまり、本来は25トンの必殺キックが、この宇宙空間においては三倍の75トンになることを意味する。

ドガアアアアアアアン！！

リザード・ゾディアーツのエネルギー体は攻撃の威力に耐えられずに爆発し、文字通り宇宙の星屑となった。

爆炎の中をファズムが潜ると同時に、装着していた三つのモジュールが解除される。

パシッ

そして、エネルギー体の中から飛び出してきた、ラストワンのゾディアーツスイッチを掴み取った。

カチ、といった具合にスイッチを押すと、ラストワンとなっているそのスイッチはONからOFFとなり、ブラックホールにでも飲み込まれたかのように消滅していった。

その直後に、

「って、うおおおおおおおおお！！」

ファズムの身体が、地球に引力によって地上へと舞い戻っていく。とはいえ、一応は大気圏外に出てしまった身だ、地上に戻るにあたって大気圏に突入し、摩擦熱による炎が起こっているわけだが、

「ふう　　さて、さつさと着陸するか」

ファズムはなんでもないようにベルトのスイッチを取り替えます。

グライダー  
〔GLIDER〕

スクエア  
左腕部位には、No.8のスイッチが差し込まれた。

〔GLIDER・ON〕

大気圏内に入って炎が治まると同時に、電子音声と共にファズムの左腕からは黄緑色のグライダーモジュールが装備され、装着者を滑空させた。

（人の眼が少ない場所は……あそこでいいか）

そうしてファズムは、召喚されて間もない頃に向った、例の廃工場に向けて舵を取ったのである。

\*\*\*\*\*

場面は変わり、ここは冬木市の深山町にある穂群原学園<sup>ほむぐはらのがくえん</sup>。

今日も大勢の高校生がここに登校してきては、勉強然り、部活しかり、趣味然りと 色んな形で平穩な日々を過ごしている。

昼飯時もとくに終了し、午後の授業さえも終わって帰りのHRも済まされた夕方頃。

この学園に通う一人の男子生徒に目を向けてみよう。

赤銅色の髪に琥珀色の童顔といった風貌の少年。

彼の名は衛宮士郎  
な高校生である。

学園の2年C組に所属する、極々平凡そ

「さて、そろそろ帰るか」

荷物を纏めて教室から出て行く。

その矢先に、

「なんだ。まだ学校にいたんだ、衛宮」

海草ワカメみたいな髪型をした優男が話しかけてきた。

後ろに数人の女生徒を連れている辺りからして、見るからに遊び人の雰囲気フキが漂う。

彼の名は間桐慎二。

弓道部に所属しており、士郎の中学時代からの友人（一応）である。

「また生徒会にゴマすって内申でも稼いでたのかい？」

「別にそんなんじゃないって。学校の備品直すくらい当然だろ？ 実際に使うのは俺達なんだから」

「ハ、衛宮に言わせればなんでも当然ってわけか。そういうところ、癪イラに障るって言った筈ハシんだけどな」

典型的な優等生と遊び人の会話は、傍からすればかなり面倒なラインで成立している。

「そうだったか？ ……悪い。それって慎二の口癖クセっぽかったから、聞き流してたみたいだ」

「ッ！ フン、そうかい。それじゃ学校にあるものなら何でも直すんだな、衛宮は」

「何でも直すなんて無理だ。精々面倒を見る程度だ」

見るからに不機嫌な顔になった慎二は、

「よし、なら頼まれてくれよ。うちの弓道場、今わりと散らかってるんだよね。弦も巻いてないのが溜まつてるし、安土の掃除もできてない。暇ならさ、そっちもやっついてくんないかな？生徒会にはつか尻尾振ってないで、元弓道部員として僕達の役にも立ってくれ」

などと、かなり自分勝手な八つ当たりとさえいえることを言い出した。

「えー？ちよつとせんぱーい。それって先輩が藤村先生に言われたコトじゃなかったー？」

「そうですね、ちゃんとやっておかないと明日怒られますよー？」  
「でもさー、今から片付けしてたら店閉まるじゃん。その人がやってくれるなら良いんじゃない？」

「悪いよー。それに部外者が片付けできるわけないし……」  
「そうでもないんじゃない。その人、元弓道部員だって慎二言つてたし、任せちゃえば？」

後ろの女子達はなんだか騒がしく話している。

女が寄れば姦しいというが、今がまさにそうだ。

「じゃ、あとはヨロシク。鍵の場所は変わってないからさ、頼んだよ、衛宮」

「ああ、構わないよ。暇だし、たまにはあそこを見とくのも悪くない」

士郎はあっさりと理不尽な頼むをのんでしまった。



この一連の流れだけでも充分わかる御人好しぶりだ。

「はは、サンキュー！それじゃ行こうぜ、みんな！後始末は衛宮がやっとしてくれるそうだから」

「あ、待ってよせんぱい！あ、じゃあ後はよろしくお願いしますね、衛宮先輩！」

こうして、士郎はやる必要の無い雑用を行う羽目となったのである。これもある意味「ブラウニー」の宿命なのかもしれない。

\*\*\*\*\*

「まったく。そなたにはとことん度肝を抜かされる。よもやバイクや戦車を宝具としているとは」

アヴェンジャーが月海原学園の教室に戻って、カースが開口一番で発したのがこれだ。

「なるほど。未来のことを知っているとというのは嘘ではないらしい。あれだけの科学技術を当たり前のように使ったのだ、そなたが真つ当な英霊ではないのはよく理解した」

教室内にてカースは、幾つかの椅子と机を分解し改造することで製作した簡易ベッドに腰掛けながら、目の前のアヴェンジャーに話しかける。

「それにしても、そなたは多くの宝具を所有しておるのだな。普通サーヴァントの宝具は1つから3つ程度が常識的だというのに、そなたは5つとはな」

アストロスイッチ、ファズムドライバー、マシンストレイダー、ブルバスター、セラフ霊子虚構世界。  
これだけの宝具を持ち合わせる英霊など、歴史や神話を紐解いても数えるほどしかないだろう。

「まあな。これで僕の宝具の殆どが開帳されたわけだ。君も僕が未  
来の英霊だと解って満足しただろう？」

「一応はな。……って、待て。殆ど、だと？」

漸く応答したアヴェンジャーだが、カースはその言葉の中に引つ掛かるものを感じた。

その様子を見て、アヴェンジャーは薄ら笑いをしながら壁に背を預ける。

「まだ有るのか？」

「ああ……しかし……すまないが、最後の一つについては詮索しないで欲しい。アレは僕の魔術師としての秘奥だからな」

「そつか……わかった」

魔術師は他者に対して自らの魔術てのちを曝すような愚は冒さない。

同じ魔術師としてカースは、アヴェンジャーの矜持を読み取って素直に引き下がることにした。

なにより、カースはその時に見て悟ったのだ。

話題が最後の宝具についてのものとなった際、アヴェンジャーの雰囲気が変わったことを。

そこには、何か大切なモノを、掛け替えの無いモノを、永久に喪ったかのような、悲哀と怨嗟が籠っていた。

「ところで、今後の方針は如何に？」

「日が暮れて夜になるまで、体力の休息と魔力の補給に務めよう」

うん、とカースは頷く。

「そして、夜になったら、穂群原学園に行く」

\*\*\*\*\*

時は刻々と過ぎていき、午後の七時過ぎとなった。

肌寒い冬の季節において、日の姿と光はとづくに地平線の彼方へと沈み、静寂なる夜の時間が訪れている。

このような時間帯となつては、穂群原学園にはもう人影はいない。今日は役職上の都合で居残りの生徒も教師も居ないことを確認し、彼女は校舎の屋上に赴いていた。

艶やかな黒くて長い髪の一部をツインテールにし、赤いコートを羽織った少女。

彼女の名前は遠坂凛<sup>とあさかりん</sup>。

赤いコートの下に制服を着ていることから解るかもしれないが、列記とした穂群原学園の2年A組所属であると同時に、学園のアイド

ルとさえ呼ばれている才色兼備の優等生だ。

しかし、それは彼女の表の顔にすぎない。

今の彼女は、この冬木の地を長きに渡って管理してきた遠坂家の魔術師として此処に来ている。

「此処が結界の起点みたいね」

凜は、魔術に精通した者にしか見えない、ある物を見ていた。

魔方陣の中央に描かれた一つの目玉からおぞましい波動が溢れているかのような、邪悪なる呪印を。

「ったく、よりもよって私の陣地に、こんな厄介なタイプの結界を張るとはね」

魔術的な結界というものは、よくマンガとかにありそうなバリアの類だけではない。

術者の有利な陣地を築くモノがあれば、敵に不利な状況を作って閉じ込めるものもある。

だが、凜が目の前にしているものは、結界の中でも特に陰湿なものだ。

簡潔に述べると、この結界が完全に発動してしまった場合、校舎内にいる生徒や教員の魂が喰われて魔力に変換されてしまう。

「アーチャー。貴方達ってそういうモノなの？」

『……………ご推察のとおりだ。人間が肉を栄養とするのなら、サーヴァントは魂や精神を栄養とする』

凜は、霊体化している相棒に問いかけた。

「マスターからの供給だけじゃ足りないってことかしら？」

『実力で劣っているのなら、物資で補うのが戦争だ。そういう意味では、この結界は効率がいい』

姿なき英霊はそう断じた。

つまり、自分だけで補えないなら、他者から奪い取ったものを糧として勝利する輩がいるということだ。

「それ、癪に障るわ。二度と口にしないでアーチャー」

『同感だ。私もこれの真似をするつもりはない』

英霊はどこか力強く答えてきた。

「………それにしても、真昼間から隣町のご真ん中で戦ったのがあるって話、本当なの？」

『ああ。私の千里眼はCランク止まり故、向こうの様子を完璧に見通せるわけではないが、それでもどこぞのサーヴァントが派手にやらかしている事ぐらいは判別がつく』

英霊は静かに、そして不可解そうに答える。

時間帯や場所を考えずに、派手な戦いを行ったアヴェンジャーに対してか、それとも………。

『（一体、奴は何者だ？）』

アヴェンジャーというありえない存在そのものに対してなのか。

「さて、それじゃあ消そうか。無駄だろうけど、足止めくらいにはなる」

凜は呪印の前に立ち、意識を集中した。  
左腕の魔術刻印に魔力を通し、結界消去の一節を読み込む。

「消去 Abzug 摘出手術 Bedienung 第二節 Mittelstand」

詠唱という骨組みを魔力に与えて、呪印の色を洗い流そうとしたとき、

「なんだよ、消しちゃうのか。もったいねえ」

第三者の音がそれを遮った。

「！」

凜が急いで振り向くと、そこには人の形をした神秘が佇んでいた。  
青い装束を身に纏い、獣のような威圧感を放つ男。

「これ、貴方の仕業？」

「いや。策を弄するのは魔術師のすることだ。俺達はただ全力を以って戦うのみ。だろう、その兄さんよ」

その言葉で凜は確信を持った。

目の前の男は、霊体化しているアーチャーを視認している。  
今の冬木市でそんなことができる存在といえれば、

「やっぱり、サーヴァント……！！」

「そうとも。で、それがわかるお嬢ちゃんは、俺の敵ってことではないんだな？」

青い男は、そう言って右腕をゆらりと上げた。  
すると、男の手中には一本の長い赤槍が、異様な魔力を纏って現われる。

次の瞬間、凜は考える前に行動していた。  
考える余裕など、今さっきにおいて存在していなかった。  
下手に考え事をしていれば、

「は、いい脚してるな、お嬢ちゃん」

呪いの長槍を避けられずに瞬殺されていただろうから。  
凜は急いで魔術刻印に魔力を通して唱える。

「E S <sup>軽量</sup> i s t g r o s . E s <sup>重庄</sup> i s t k l e i n !」

身体の軽量化と重力調整の一小節。

凜は羽毛のように軽くなった身体で床を蹴り、フェンスを飛び越えた。

屋上から飛び降りて落下していく凜は、さらに詠唱を行う。

「<sup>戒律引用</sup> V O X G o t t <sup>靈草は地に遠る</sup> E S A t l a s ! アーチャー、着地  
任せた！」

魔術の力、アーチャーの助力によって落下の衝撃を殺しきると、凜は間髪いれずに走り出す。

こんな手狭なフィールドでアーチャーの実力は発揮できない。  
もっと広い場所、校庭辺りを目指して駆け出し、常人を遙かに越える速度で到着した。

だがしかし、

「いや、本気で良い脚だ。ここで仕留めるにはちよいと勿体無さすぎるか?」

サーヴァント相手には時間稼ぎにさえならない。

「アーチャー!」

凜の言葉にに応じて、一人の英霊が実体化する。

逆立った白髪と発達した筋肉、引き締まった体に赤い外套を纏った長身の男だ。

「へえ。いいねえ、話が早い奴は嫌いじゃない」

青い男は真紅を槍を持ちながら軽口を叩く。

「ランサーの、サーヴァント」

「如何にも。そういうあんたのサーヴァントはセイバー……………  
って感じじゃなさそうだな。何者だ、テメエ?」

ランサーは殺気に満ちた目でアーチャーに問いかける。

「……………ふん。真つ当な一騎打ちをするタイプじゃねえな、  
てめえ。となると、アーチャーか」

ランサーとアーチャー、赤と青の騎士は向かい合う。

「いいぜ。好みじゃねえが、出会ったからにはやるだけだ。そら弓<sup>エモ</sup>  
を出せよ、アーチャー。これでも礼は弁えてるからな。それぐらい  
は待ってやる」



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アーチャーは静かに待っている。  
何をかつて？決まっている。

「アーチャー。手助けはしないわ。貴方の力、ここで見せて」  
「ク」

主人の許しを得た瞬間、紅き弓兵は笑った。

その瞬間、何時の間にか手にしていた短剣を以ってしてアーチャーが挑む。

「バカが！」

ランサーはそれを穂先で迎え撃つ。  
迎撃による一撃を、アーチャーは短剣で受け流した。

「ッ  
」

槍というのはえてして長く、それを活用する距離が必要となる。  
ならば懐に入ってしまったえば、一気に叩けるだろうと考える者もいる  
だろう。

だが、ランサーは自ら距離をつめて敵の前進を許さなかった。

「たわけ、弓兵風情が接近戦を挑んだな！」

英霊として祭り上げられるほどの腕前。  
そこには従来の定石は通用しない。

長柄の弱点である一定の間合いの必要度合いさえも、ランサーは自らの技量のみで克服している。

「ぬッ  
！」

高速の一撃一撃を、アーチャーをよく受け流した。  
しかし其処どまりだ。  
仮にも槍使いを相手に、弓使いが接近戦で勝つほうが無謀な話というもの。

「ハッ  
！」

アーチャーは巧みにかわし、時折反撃するも、ランサー相手には必殺とは言いがたい攻撃。

だがそれでも、それは常人では決して演じること適わない武宴だ。

「………うそ」

伝説や神話で語り継がれる英雄同士の対決。

その常軌を逸した戦いに、不覚ながら凜は魅入られていた。

その間にも、赤と青の攻防は続く。

青の槍兵がさらに敵を穿つ攻撃を飛ばした。

数は三つで、全て急所狙いものだ。

ギンッ

でも、それを一對の何かが阻んだ。

「……………ふ」

「チィ、二刀使いか」

アーチャーの手には、先ほどの短剣ではなく、陰陽を表す黒と白の中華刀が握られている。

「八、弓兵風情が剣士の真似事とはな」

次の瞬間、

ギンツ、ギンツ、ギンツ、ギンツ、ギンツ！！

ガアツ、ガアツ、ガアツ、ガアツ、ガアツ！！

途轍もない攻防が、勢いを増して展開される。

攻勢となって懐に入れまいとするランサーと、二刀を盾にしながら距離を詰めようとするアーチャー。

ここに到っては旋律じみた剣戟は、今となっては百に及ぶだろう。

アーチャーは幾度かの攻撃を受けるたびに何度も刀を失ったが、その都度、同じ刀が手中に収まり、何事もなかったように剣舞を続行する。

それを見た途端、ランサーは一度雑ぎ払うように槍を振り回し、一度戦いを仕切り直した。

目の前の弓兵の何かを問い質す為に。

「……………二十七。それだけ弾き飛ばしてまだあるとは」

本来サーヴァントの武器とは、彼等が生涯をかけて使いこなすに到った唯一無二の代物。言うなれば、敵を確実に葬る為の必殺技と同意なのだ。

それが次から次へと代用品が出てくるなど、規格外の領域だ。

「どうしたランサー。様子見とは君らしくない。さきほどの勢いはどうした？」

「……ちい、狸が。減らず口を叩きやがって」

ランサーは困惑と苛立ちを込めた口調でいいつつも、

「まあいい。訊いてやるよ。テメエどこの英雄だ？二刀使いの弓兵なぞ、聞いたことが無い」

「そういう君はわかりやすいな。槍使いには最速の英霊が選ばれるというが、君はその中でも選りすぐりだ。これほどの技量は世界中探しても三人程度だろうが、そこへ獣の敏捷さを当てはめれば、辿り着く名前はただ一人」

アーチャーは自らの正体に関する話題を、ランサーのそれへと強制的にもっていく。  
するとどうだろうか、

「ほう。よく言った、アーチャー」

ランサーの雰囲気が変わった。

「ならば喰らうか？我が必殺の一撃を」

「止めはしない。いずれは越えねばならん敵だ」

槍を構え、青き槍使いは一撃必殺のそれを穿たんとしている。凜はこの時、ランサーの槍をみて思った、否、確信した。

あの槍が解放されたとき、アーチャーは必ず殺される。

穿てば確実に、敵の心臓を貫くとされる、魔槍の呪い。

如何に優れた英雄とて、あれを喰らえばタダではすまない。

とはいえ、運命というのはどこまでも数奇だ。

「誰だ……！！！」

偶然にも覗き見していた第三者ハンベによって、戦況は激変することとなる。

ランサーはさきほどまでの鬼気から打って変わり、両脚を動かして別の獲物を追いかけていった。

「……え？」

凜は一体誰だと思って視線を校庭の向こう側に送る。

その先には、制服姿の少年がいた。

「まさか、生徒！？まだ学校に残ってたの！？」

魔術による神秘は基本的に隠匿すべきもの。

それが一般人の目に触れたとなれば、記憶に細工するか、殺害するなどの手段が執り行われる。

最速の英霊が処理に向った時点で、その生徒の命運は絶望的といえよう。

「……………失敗した。ランサーに気をとられて、周りに気が付かなかった……………って、アーチャー。アンタ、なにしてんの？」

「見て判らんか。手が空いたから休んでいる」

「んなわけないでしょ。ランサーはどうしたの？」

「さっきの人影を追って行ったよ。大方、消しに行ったのだろうな」

それを聞いた瞬間、凜の思考は一瞬停止して、再起動する。

「追ってアーチャー！私もすぐに追いつくから！」

「ふ」

アーチャーは命令されるがまま、ランサーを追っていった。

「くそ、なんて間抜け！」

それは他の誰でもない、自分自身と、犠牲になる生徒に向けられた言葉。

\*\*\*\*\*

校舎内の廊下。

校庭で繰り広げられた激戦を眼にしたせいで、槍兵から逃げ回る男子生徒。

友人から頼まれた掃除に思いのほか時間が掛かり、それが災いして命の危機に晒されている少年の名は、

「ハア・・・ハア・・・！」

全力疾走による疲労で荒い息をつく。

「なんて・・・ばかな」

彼は、衛宮士郎。

英霊によるバケモノ級の戦いを目にした者の名前だ。

「ハア・・・あ・・・なんだったんだ、今の・・・  
・？もう一人、いたような気がしたけど・・・」

士郎は可能な限り、逃げられるだけ逃げた気概で遠くまできた  
そこで思考する余裕を得たが、

「けど、これで兎も角」

「追いかけてこは終わり、だろ」

それも徒勞の一つに終わった。

「いいや、よく頑張ったというべきだ」

かに思われた。

「！」「」

ランサーと士郎は、第三者の声に、その方向へと顔を向ける。  
そこには、銀髪碧眼の青年が此方へと歩む姿がある。

「……………アヴェンジャー」

「やあ。また会ったな、ランサー」

互いに若干の殺気を籠め合いつつの挨拶と、

「……………初めまして、衛宮士郎　　というべきか」

「え……………なんで？」

どこか柔和な挨拶をするアヴェンジャー。

「なぜ此処にいる、アヴェンジャー？」

「君と話し合いをすうるために、スタンバってた。ここは御三家の一人が通っているし、状況によっては戦場になりやすい」

「話だと？俺達サーヴァントが御託ならべたところで、マスターの命令によっては意味がなくなるぜ」

どうやらアヴェンジャーはランサーを説得する為に現われたらしい。

「あんな悪辣マーボー野郎に仕えていて面白いのか？君のような輩にとつては、首輪をされるのと同じくらいに窮屈だと思うが」

「……………ますますもって謎だな。俺のマスターのことを知っていやがるクセして、話し合いをしようと言い出すとはな」

士郎は目の前にいる二人の会話にまったく付いて来れなかったが、それでも理解しようと必死に考える。マスターとは何か、サーヴァントとは何かを。

(あんな連中にも、主人がいるってことなのか？自分のこと、下部  
サーヴァント  
って言ってたし……………?)



会話の中にでてきた単語の会話の流れから、ほんの少しだけ状況に触れていく士郎。

「迷ってほどではない。ただ君に相応しい存在は別にいるというだけだ」

「要するに、あいつを裏切ってお前らが用意した輩に鞍替えしろってか？」

内容を把握したランサーは、ほんの少しだけ軽口めいた言葉の次に、

「悪いがお断りだ。令呪がある限り、不服極まる思いではあるが奴は俺のマスターだ」

「では、その契約を僕が断ち切ろう。そして、ゴッズ・ホルダー伝承保菌者と再び……といえ話を聞いてくれるか？」

「なにッ!？」

提案条件を耳にして、ランサーが狼狽した。

「シャドー・オン投影開始」

その際にアヴェンジャーは素早く詠唱し、

「ルールブレイカー破戒すべき全ての符」

対魔術宝具たる歪な短剣を槍使いに突き刺したのだ。

「ッ!」

その瞬間、ランサーは自らの縛る鎖が一気に弾け飛び、魔力の供給ラインが掻き消えたことを一瞬で自覚する。

「貴様、なにをやった？」

ランサーの視線は、自らの立場を「はぐれサーヴァント」に貶めた歪な短剣に向けられている。

短剣は稲妻を描くように曲がっており、殺鼠力もそのへんのナイフ程度だ。

しかし、この短剣は黒く染まっている。なにかドス黒いものによって、属性が変わり果ててしまっている。

「これは、裏切りの魔女の象徴たる一品。その贋作であり贋作で無いものだ」

「そいつで、俺とマスターの契約を絶ったのか」

「その通り。さて、どうするかねランサー？このまま指を銜えて自然消滅するか、元の鞘に納まるか……」

「ったくよお……どこが話し合いなんだか。これじゃただの脅迫じゃねえか」

ランサーは頭をかきながら言い、アヴェンジャーはニカつと笑って、

「それでもない。君が再契約を果たした後、彼女を交えて方針を決めるのだから」

「ケツ お前の思惑に乗るのはえらく不満ではあるが、こうなっちまった以上は仕方ない。俺も流石にこんな中途半端なところで不完全燃焼なんざしたくねえしよ」

「では決まりだな。ついてこい……」

アヴェンジャーはランサーの了承を得ると、急ぎ携帯端末を用いて「光の門」を開通させた。

清澄な雫の音が静かに響き、淡く優しい色を伴って、それは現われ

る。

「衛宮士郎」

「え………?」

突然呼びかけられて、士郎は一瞬困惑した。

「今夜中に土蔵へ行き、召喚の呪文を詠唱しろ」

アヴェンジャーは士郎に近づくと、ポケットから一枚のメモを取り出して士郎のズボンのポケットに突っ込んだ。

「じゃあ、また会おう」

それからすぐに距離を離し、軽く手を振るアヴェンジャー。

「お、おい待てよ！何を呼び出せってんだ!？」

士郎の吼える声にも、耳を傾けることなく、アヴェンジャーはランサーを連れてあちらの世界へと姿を消していつてしまった。

「ちよ、待て！」

士郎は手を伸ばしてみるも、時既に遅く「光の門」は消失していた。

「一体全体、なんなんだ、あいつら………?」

『それを知る必要は無いぞ、若造』

「ッ！」

世界というものには、悉く残酷だ。

変えられたはずの運命を、奇怪な形で補正し、再現しているのだから。

ボオオ

ザグツ

「あ……………あ……………」

士郎は少しだけ、懐かしい感覚に見舞われた。

十年前の幼い頃、「士郎」という名前以外の全てを失った時のことを思い出した。

あの時、町の一角を燃やし尽くしていた炎と同じものが、自らの心臓を貫いて焼く尽くし、幼子でも十二分にわかる程の死の気配が、今直ぐ其処にあるのだから。

『あの男と擦れ違いになったのはほとんど残念だよ。まあ良い、貴様でせめてもの無聊の慰めとする』

吐血する余裕もなかった。

ズザッと引き抜かれた炎の刃は、持ち主の意志に従い消滅する。

「て、め……………え……………」

『テメエではない。我が名はフェニックス・ゾディアーツだ。冥途の土産として覚えよ』

名乗りを挙げたクロークの異形は、宇宙の闇を纏って廊下から姿を失せた。

そうしてただ一人だけ床に倒れ、今の一撃で血の流れの元さえ失い、視力さえも失くし始める士郎。

そんな彼に残っているのは、意識と耳だけだ。

僅かに聞こえてくるのは、急いで走ってくるヒト一人分の足音。士郎はそれが誰なのかさえ判らず、ただ必死に生きようとした。

「……………心臓を一突きにされた拳句に焼かれるなんて……………」

かすかに聞こえてきたのは美しい声。

口調と声音からして、士郎と同年代の少女だろう。

「それでもまだ生きてるってのは、凄いな」

士郎の容態をみているのか、声の主は純粹に感嘆している。

「……………せめて、看取ってあげるぐらいはしないかね」

しかし、声の主はここで見てしまう。

うつ伏せになっていた彼を仰向けにしたことで、士郎の顔を見てしまう。

「……………やめてよね。なんで選りによって、アンタが」

確かな怒りを含んだ声。その矛先は、士郎に向けられている。

偶然とはいえ、こんなタイミングで学校に遅く残っていた士郎の不  
幸さ加減に。

少女は何かをしだした。

もはや失明したも同然の士郎には詳しいことはよくわからないが、  
眼前の人物が何か凄いことをしようとしていることだけは、何とな

く判った。

何を手を持って、掌を士郎の胸に当てながら、少女は真摯になって作業に打ち込む。

ぼたり、ぼたりと、真剣み溢れた表情で汗を一筋二筋と流しつつ。

「ふう」

するとどうだろうか？

奪い取られた筈の物が、正しい位置で、正しい鼓動を打っている。全身を駆け巡り血流がそれを教えると同時に、証拠となった。

「つかれたぁ……………」

為すべきことをやり終えたのか、少女は一気に脱力した声を出す。

「ま……………仕方ないか。ごめんなさい父さん。貴方の娘は、とんでもなく薄情者です」

カラン、そんな音が床に落ちる音として鼓膜に届く。

士郎の意識はそこで一度途切れた。

少しだけの間とはいえ、止まっていた血流が再び動き出し、脳髄に何かしらの負担がかかった所為かもしれないが、今となってはどうでもいい。

これで確実に、士郎の心臓は復元されたのだから。

\*\*\*\*\*

冬木教会。

「ん」

そこで、言峰綺礼が低く唸るように声を漏らす。

「どうかしたか、言峰よ？」

声をかけてきたのは、金髪紅眼で傲慢そうな覇気を漂わせる長身の男。

「ランサーとの繋がりが消えたらしい」

「ふっ。あの雑兵めが」

金髪の男はウィンググラスを片手にし、拍子抜けと言わんばかりだ。

「アヴェンジャー………八番目の英霊か」

\*\*\*\*\*

場面は打って変わり、衛宮家の武家屋敷に切り替わる。

「あ……………はあ、はあ　　あ……………」

学校で目覚めた土郎は、激しい怠さと頭痛を堪えつつ、どうにかこうにか歩いて自宅まで戻ってきていた。

無論、あれだけのことがあったので、未だ身体は本調子ではない。

「  
」

床に座り込み、大きく息を吸い込んだ。

空気中の酸素が取り込まれ、幾分か気分が落ち着いた。

しかし、心臓が鼓動するたびに、イヤな嫌味も走ってくる。

「殺されかけたのは、本当か」

実際には殺されたも同然だった。

だがそれを、そんな状況から土郎を救い上げてくれた人物がいたのも事実。

その人物に会えたら、きちんとお礼をしたいと思ったのも、ある意味土郎らしいだろう。

「……………何が起こってんだ、この街で……………」

常識外の戦いを繰り広げる二人の騎士、自分のことを知っていた謎の男、そして自分を殺した怪物。

「はあ、どうなってやが　　あ、ぐ……………!!」

気を抜いた瞬間、流れ込むように痛みと嘔吐感がせり上げてくる。



「が………うう………！」

ひたすらに堪えに堪えた。

「あ………は、ぐ………」

無意識の内に、炎の刃で貫かれて焼かれた筈の部分に触れていた。

「くそ、こりゃ当分、夢に見るぞ………」

普通なら夢どころかトラウマものだろう。

「………よし、落ち着いてきた」

幼少の頃からやっていた精神集中の賜物か、士郎の思考は短時間でクリアになった。

ズボンのポケットから、一枚のメモを手にとって、士郎は謎の青年のことを思い出す。

「土蔵で、これを読め、か」

初対面であるにも関わらず、士郎が魔術と関わりがあることを見抜き、あまつさえ鍛錬場所が土蔵であることを知っていた銀髪碧眼の男。

初級の魔術の発動にさえ低確率でしか成功させられない五流の魔術使い。

それが衛宮士郎のもう一つの顔だ。

「 やってみるか」

メモを手にししながら、士郎は立ち上がり、縁側のガラス戸を開けて庭に出た。

因みにこの屋敷と庭は結構広くて立派なつくりをしていて、敷地内には古風な土蔵まで建ててある。

幼い頃の士郎にとって土蔵は遊び場であり、今となってはガラクタ弄り兼魔術の鍛錬場となっている。

重く冷たい扉を開け、士郎は暗い土蔵の中へと入っていく。

十年間、生活の一部となるほどに慣れ親しんだ場所だが、何故か今日だけは何か異質なものを感じずにはいられない。

「  
」

地面に転がっている修理途中のガラクタには目もくれず、士郎はメモに目を通す。

(このまま何もしない訳にはいかない………！)

自分の住んでいる街が今、魔境に等しい状況下となりつつることなど、身を以って経験した。

士郎は心の底から怖いと思った。                      しかしそれとは別に、彼の肉体はやらねばならないという衝動に駆られた。

トレース・オン  
「同調開始」

何時の間にか、無意識に呪文を唱えていた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。  
降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に到  
る三叉路は循環せよ」

メモを見ながら、そこに書かれた呪文の内容を忠実に音読する。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返される都度に  
五度。ただ、満たされる刻を破却する」

今この時、士郎の身体は魔術を発動させる一個の機械となっている。

「告げる………汝の身は我が元に、我が命運は汝の剣に。聖  
杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

メモに書かれた呪文の意味　それを士郎は理解しきれてはいない。  
だが、これが凄まじい者を引っ張り出す為にあることだけは感じ取  
れた。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を  
敷く者」

残るはあと少し。

それで、詠唱は完成する。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ。  
………」

その瞬間、

「あ、つ………ッ！」

手に持っていたメモが、役目を終えると同時に燃え果てた。  
おそらく、アヴェンジャーが前もって仕掛けておいたのだろう。

士郎は一瞬火傷しかけたが、手に走った痛みは火の熱だけではなく、  
手の甲に浴びせられた鈍痛に困惑する。

皮膚に焼きつくようにして現われたのは、三画の奇妙な紋様であり、  
まるで刺青のようにも見える。

だがそんなことは次に起こる出来事で些事へと追い遣られた。

地面に突如として星屑のような儂い光の魔方陣が描かれたのだ。  
複雑怪奇で一目では写しきれないような魔方陣は徐々に形を完全な  
ものとし、そして壮絶な燐光を齎す。  
そこから現われ出たのは、七人目の英霊にして最優のクラスとし  
て謳われる者。

「 問おう。貴方が、私のマスターか」

騎士の中の騎士、剣士の中の剣士たる英霊・セイバー……！！  
今この時に序章は終わりを迎え、本章の始まりを告げる。

そう 八人の英霊と魔術師による、第五聖杯戦争の幕が開かれ  
ることになったのだ。

剣・士・召・喚（後書き）

次回、Phasm/Mask rider

狂・気・来・襲

英雄スィッチ・オン！

クラス：アヴェンジャー

マスター：カース

真名：

性別：男性

身長・体重：180cm・67kg

属性：混沌・中庸

ステータス

筋力：D（A） 耐久：D（A） 敏捷：D（B） 魔力：A 幸

運：C 宝具：A

保有スキル

復讐心：A+

現在、マスターでも確認不能につき、未詳。

対魔力：B（A）

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけることは難しい。未変身の状態においては、身につけている黄金の指輪型ペンダントと、純銀のブレスレットによってこのスキルが成り立っている。

尚、ファズムに変身すると「スターダストマント」の恩恵によって対魔力がランクアップし、A以下の魔術を全てキャンセルする。事實上、現代の魔術師ではファズムを傷つけられない。

単独行動：A+

マスター不在でも行動できる能力。

しかし、宝具などの使用で大量の魔力を必要とする際はマスターからのバックアップが必要。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

魔術：B（A+）

オーソドックスな魔術の大半を取得。

主に異端の投影魔術や虚数属性の魔術を得手としている。

キャスターモジュールを装備することで大魔術や儀礼呪法が容易に発動可能となる。

## 狂・気・来・襲

「問おう。貴方が、私のマスターか」

そこに佇み、此方を見ているのは、一人の少女だった。

金砂のように美しい髪、透き通るような翠緑の瞳、白魚のような柔肌。

だが服装は、青いドレスの上に、銀色の鎧や籠手を身につけた戦支度。

「サーヴァント・セイバー。召喚に従い参上した。

これより我が剣は貴方と共に在り、貴方の命運は私と共に在る

ここに、契約は完了した」

そう、彼女が此の世に召喚された時点で、契約は為された。

「マスター、指示を」

この瞬間より、衛宮士郎は半人前の魔術使いではなく、マスター魔術師となつたのだ。

「マスター……俺が……?」

今となつても尚、信じ切れなかった。眼前に佇む160cm足

らずの小柄な少女は、莫大な魔力が人型となっている存在であり、自分が彼女を従える主人となつたなど。

士郎は少女の戦場の華と例えるに相応しいその可憐な美しさに、思わず己を見失いそうなほどに惹き込まれてしまった。

だがしかし、

『七人目……これで八人のサーヴァントが揃ったな』

その神秘的な時間は、無粋な侵入者によって掻き消されてしまった。

「  
」!

土蔵の外から聞こえてきた声に、セイバーは疾風の如き勢いで向って行く。

「あ、あの声……!？」

士郎は聞こえてきた声に覚えがあった。

心臓を焼き払い、一度だけ衛宮士郎を殺した、あの声だ。

ギガンツ！ギガンツ！

土蔵の扉から顔を出して庭を見てみれば、そこはもう戦場と化している。

ゾディアーツはクロークから露出した両手に紅蓮の炎を纏わせ、形を与えて固定化し刃となしている。

セイバーはその手に、幾重もの風を纏って見えなくなった得物を持つ隙の無い構えをしている。

『流石は最優のサーヴァント。様子見をしにきた成果はあったな』

「貴様は一体何者だ？見たところサーヴァントでも、幻想種でも無さそうだが」



『一言で表せば、星の使徒だ』

ゾディアーツはそう言うと、身に纏っているクロークを脱ぎ捨て、全身を顛わにする。

神秘の炎を髣髴とさせる紅蓮と黄金の身体。そこには星座が描かれている。

彼奴自身の手足や背中に生えている翼や羽毛、顔にある鋭い眼と嘴を見れば、それが何の星座かは皆目検討がつく。

「……不死鳥座……」

『その通り。太古の昔より不死身の代名詞とされている幻想種の中の幻想種。それがこのフェニックス・ゾディアーツだ』

フェニックスの気分の高揚を示すように、体の星座が光を灯しだす。

『ふっふっふ。その若造のことなど、今となってはどうでも良くなった。今夜はこの身を以って、サーヴァントの力量を測るとしよう』

フェニックスは両腕の炎を突き出すように進んでいく。

「ならば試すがいい、不死鳥座よ。ただし、この身に染み込んだ剣戟は、易々と測れるものではないぞ！」

それを迎え撃つのはセイバーの不可視の剣。

ギツギツギツ！ガッ！ガッ！ガッ！

風と炎。

その二つの刃が何度も互いにぶつかって拮抗する。その勢いやいなや、フェニックスの双炎剣が攻撃の数にモノを言わせるガトリングならば、セイバーの剣戟は火力云々でゴリ押しする散弾銃のようなものだ。

「ハアアッ！」

『フッ！』

両者は互いに譲ることなき怒涛の剣戟を繰り返す。

『……厄介なものだな。切っ先が視えぬというのは』

が、フェニックスはここで一旦距離をとった。

「どうしたフェニックス？ 佇んでいては不死鳥の名が泣こう。来ないのなら、こちらから行くが」

『気の早い小娘だな。まあ案ずることは無い。こちらも、それなりに力を見せるつもりだ』

バン！バン！バン！

そう述べ立てると、フェニックスは身体に刻まれた星座から赤々とした炎を弾丸を打ち出し、セイバーの足元に命中させ、土煙を発生させた。

「ハッ！」

セイバーは剣を振るい、土煙を払いのける。だが煙が晴れた先に、フェニックスの姿は居ない。

「奴め、どこへ……?」

『ここだよ、セイバー』

「上ッ?」

セイバーは急ぎ上空へと視線を移す。

そこには、背中から業火の翼を生やし、空中に浮かぶフェニックスの姿がある。

『今度は其方が呆ける番だな、セイバー』

「それはどうかなフェニックス?……風よ　　!」

両手で剣の柄を強く握り、不可視となった刃を空中のフェニックスに向けて構えるセイバー。

ビュオオオ!という風の音は、次第に強風のそれとなり、不可視の剣を起点に嵐を巻き起こす。

「ストライク・エア  
風王鉄槌!!」

突きの一撃が空に向って放たれた瞬間、あらゆる些細な障害を一発で吹き飛ばす剛風が吹き荒んだ。

一直線にフェニックスを狙って飛んでいく極太の風の大砲。

光を屈折させて愛剣を不可視にするほどに織り込まれた風の一部を解放して打ち出すという、Cランクに値する攻撃技。

『ン　　ッ!』

それに対抗してフェニックスは極太火炎放射を行い、ストライク・エア風王鉄槌と衝突させる。

ビュオオオッ!!

ポオオオオツ！！

烈風と烈火が真正面から鬨ぎ合う。

さながら、二匹の龍の息吹が激突しているかのように、鮮烈で凄絶で、そして美しささえも感じさせる光景だ。

そして、

ツドウガアアアアアアン！！

風と炎は、その存在を共に消し去ることとなった。

凄まじい爆発が起こり、さぞや近所迷惑必死な騒音となったことであろう。

ついでにいうと、爆煙まで発生したために、庭とその上空の様子が今一把握しかねる。

「お、おい、大丈夫なのかよ……！！？」

傍観に徹せざるを得なかった土郎だが、事がここまで大きくなれば自分一人だけ立ち呆けているわけにはいかない。

土蔵から出ると、土郎は庭に足を運んでいく。

だが、土郎が爆煙の近辺にまで来た瞬間、その煙は一瞬で晴れた。

『はは、ハハハハハ！久しぶりに楽しめよ！』

「……………ッ！」

セイバーが未だ厳しい面持ちであるにも関わらず、フェニックスは

どこまでも愉快そうに笑い声を盛大に吐き出す。

『お互い、決め手こそは使わなかったが　なるほど、これがセイバーの性能か。実に有意義な時間となったよ、感謝しておくべきだな』

「逃げるつもりか？」

セイバーは咎める様に問いかけた。

『逃げる？戦略的撤退と言ってもらおうか　何より、今の行動で相当我等は目立ったはずだ。他の陣営が来るのも時間の問題だろう。それ故に、セイバー……今宵の勝負は預けたぞ』

それだけ言い残して、不死鳥座は宇宙の闇へと埋もれて姿を消してしまった。

敵が居なくなっただけを、視認情報だけでなく、気配面でも理解したセイバーは、一時的に剣を降ろして楽な姿勢になる。

士郎はそのタイミングで、セイバーに話しかけた。

「お前、何者だ？」

「何者もなにも、セイバーのサーヴァントです。貴方が呼び出したのですから、確認するまでもないでしょう」

士郎の質問に、セイバーがピシャリと言い放つ。

「セイバーのサーヴァント……？」

「はい。ですから、私のことはセイバーと」

事務的に答えるセイバー。

「……俺は士郎。衛宮士郎。この家の人間だ」

なんだか間抜けくさいきもするが、一応名乗るぐらいはしないと、この異様な空気に耐えられない。

「いや、違う。今は無し。俺が訊きたかったのはそう言うことでなくて……」

「わかっています。貴方は正規のマスターではないのですね」

「え……?」

「しかし、それでも貴方は私のマスターです。契約を交わした以上、貴方を裏切りはしない。そのように警戒する必要はありません」

士郎はメモ通りに呪文を詠唱しただけで、聖杯戦争に関する知識は何も無い。

ただ彼は最低限の魔術が使えるというだけの魔術使いであって、根源や「<sup>カラ</sup>」を指す正当な魔術師ではないのだから。

ついでに、士郎はセイバーに言いたいことがある。

「それは違う。俺、マスターなんて名前じゃないぞ」

「ではシロウト。ええ、私としては、この発音のほうが好ましい」

「っ……!」

次の瞬間に士郎は頬を紅くしてしまう。

だって初対面の美少女にこんなことを言われれば、真つ当な感性ある少年ならうるたえたりするだろう。

しかし、そんなことはまたしても些事と化す。

「ッっ……!」

セイバーを召喚した直後に現われた左手の刻印が突然疼き出したのだ。  
まるで剣と鞘の装飾を表すような赤い刻印は、何かを報せるようにズキズキと痛み出す。

「それは令呪れいじゆと呼ばれるものです、シロウ。私たちサーヴァントを律する三つの命令権であり、マスターの命綱でもある。無用な行使は避けるように」

令呪に関する説明を簡単に済ませると、セイバーは士郎にこうも言った。

「ではシロウ。先の戦闘に寄って来たと思われる者が、この屋敷の近辺まで来ています。このまま一気に、二人の外敵を迎え撃ちます」

「……外に、敵？ちよつと待て、お前まだ戦う気が……」

咎めようとしても遅い。セイバーは一つ飛びで塀を乗り越えて屋敷の外周へと出て行ってしまった。

当然、士郎も急いで駆け出し、門から塀の外へと飛び出す。息を必死にしながら、眼を凝らす。

月の光が雲で隠れるギリギリのところ、漸く士郎の両目はセイバーを視認した。

だがしかし、そこにはセイバーが誰かに向けて剣を振るい、倒れ伏させていた。

斬り付けられたのは大柄な男で、彼は身体を斬られた直後に、

「アーチャー、消えて……」

少女の命令は絶対であるかのように、強制的に姿を消失させる。

しかし、もう一人……消えた男の後方には少女と思われる人物がいた。

少女は懐から何かを取り出し、それを投げつけると同時に発破をかける。

今の土郎では一発たりとも真似できないほどに強烈な魔力の弾丸。だがその強大な魔力の塊を、セイバーは事も無げに無効化したのだ。

「  
！」

セイバーが強いことは先の戦闘で判っていたが、まさかあれほどの魔術を無に帰すとは思ってもよらなかった。しかし土郎が注目したのはその後だ。

「今の魔術は見事だった、メイガス魔術師」

セイバーが、不可視の剣の切っ先を少女に向けて、今まさに介錯の一振りをするとしている。

それを見た瞬間、土郎の身体は思考よりも本能を優先して稼動した。

「止める……セイバー……！！！！」

近所一体全てに響き渡る大声。

それによって、セイバーの動きが止まる。



「……………止める。頼むから止めてくれ、セイバー」

「何故止めるのです？アーチャーとそのマスターは、何れ倒さねばならぬ敵です」

「だから、俺はこの状況がよくわかってないんだ。事を起こすならまず、俺が納得するよう説明するのが筋だろ？」

セイバーは剣の位置を少しだけおろして、士郎の言葉に耳を傾ける。

「順番が違つだろセイバー？俺はお前らが何なのかを知らない。けど話すなら訊くから、そんな事は止めてくれ」

「そんな事、とはどういう意味ですか？無闇に人を傷つけるな、などという理想論を語る気ですか？」

「え……………？」

思いのほかに冷たい応対。

「敵でアレ無闇に命を絶つなというのであれば、その命令は従えませんが。敵を倒すという行為をやめろというのであれば、令呪を以つて律しなさい」

などと、セイバーは一步も退こうとしない。

士郎は何か言つてやろうと口を動かした瞬間、

「……………で？何時になつたら剣を下げてくれるのかしらね？セイバーさんは」

別の声が遮つた。

「諦めなさい。敵を前に下げる剣はありません」

「マスターが下げろって言うてるのに？へえ、セイバーのサーバーとあるつものが、主に逆らうってこと？」

不可視の剣を強く握るセイバーに対し、少女は挑発気味に牽制する。

「誰なんだ？」

士郎は女の声を訝しさを感じつつも、少女の声には聞き覚えがあった。

「こんばんわ、衛宮くん」

「お前……遠坂……？」

だがその正体はあっさり割れた。  
学園のアイドルは、なんだか人工感満載の笑顔で挨拶してくる。

「えっと……遠坂、今のって、魔術……？ってことは、あの、その……」

「そ。貴方と同じ魔術師よ。今となっては隠しあう必要は無いけどね」

こんな夜中にピンポイントで衛宮邸に訪れ、明らかに常人離れた存在を連れていた時点で、遠坂凜が普通ではないことは一発で判明した。

しかしだからといって、この後どういう反応をすればいいか、今一わからない。

「いいから中で話しましょう。どうせ衛宮くんは、なにも解ってないんでしょ？」

「ッ」

凶星である。

遠坂凜は、士郎の仕草と表情からそれを読み取ると、そのまま衛宮家の門へと向おうとする。

「ちょ、待てよ遠坂！お前なに考えてんだ！？」

「バカね。色々と考えてるわよ。だから話そうって言ってるんじゃない。衛宮くん、突然の事態に驚くのも良いけど、素直に認めないと命取りってこともあるのよ。ちなみにそれが今だとわかって？」

「ッ……」

「分かればよろしい。それじゃ行こうか。衛宮くんのお家にね」

と、我が物顔で門を潜っていく可憐な美少女。

でも士郎にとつて、この遣り取りは彼女に対する幻想を一発で打ち砕いていた。

「………なんかスゲエ怒ってるぞ、あいつ……」

そこには近寄りがたい高嶺の花ではなく、近寄りたくない「あかいあくま」が居たのかもしれない。

\*\*\*\*\*

月海原学園校舎、一階廊下、保健室前。

「此処に、バゼットがいるのか？」

「半信半疑ならその眼で見定めるといい」

青い槍兵ランサーは黒い復讐者アウエンジャーに促され、妙に落ち着かない表情でドアに手をかけ、ゆっくりと開けた。

ガラガラ、という古めかしい音が鳴り、ランサーが保健室の中に入る。

「ん、来たか、ランサーよ」

「あん時のネエちゃんか」

出迎えたのはカーズだった。

鮮血のように綺麗な長髪を煌びやかに整えていたようで、直ぐ近くの机には櫛が置いてある。

「………そこにいるのか？」

「うむ、見ての通りじゃ」

ランサーの視線は、カーテンによって中の様子が隠されたベッドに向く。

ゆったりと、しっかりとした歩調でランサーはカーテンを乱暴に開けて、ベッドの様子を確認した。

「」

そこには、切断された左腕に十重二十重もの包帯が巻かれ、楽な体勢で寝かされている元マスター・バゼットの姿があった。

何か身体に妙な仕掛けが施されたんじゃないかと勘繰りもしたが、見たところ大丈夫そうだ。あくまで治癒魔術や医学的な応急処置が施されただけらしい。

「ランサー」

アヴェンジャーが呼びかけた。

「……………礼ぐらいは、言つとくべきか？」

「それは再契約の後でもいいし、言わなくてもいい」

「兎にも角にも、今は執行者の眼を覚まさせ、早急に呪文の詠唱をさせねばのう」

パチッ

右手の指を軽快に鳴らし、カースは一言だけ呟く。

「Awake<sup>起きよ</sup>n」

暗示による睡眠から、バゼットを目覚めさせる言葉を。

「……………ん」

「ッ　　おい、バゼット」

「ん、あ……………」

人形のように動かなかったバゼットの顔に変化が現われ、ランサーが声をかける。

バゼットは目元や口元を僅かに動かし、唇から声を微量に吐き出す。

「ああ……………ラン、サー……………?」

目蓋が開けられ、網膜に光が差し込むと同時に、バゼットの瞳にはランサーの姿が映った。

「へっ……やっぱし生きてやがったんだな、バゼット。主従揃って、生き汚いトコまで似てるとはなあ」

「此処は……？私は、なぜ……？」

「それは、この二人に教えてもらうこつたな」

ランサーは顔を動かし、顎で後ろの二人を指名した。

「……貴方達は、あの時の……」

「こんばんわ。伝承保菌者ゴッズ・ホルダーの封印指定執行者」

「まずは、そなたの容態と、現状を全て話さねばならんな」

こうして、アヴェンジャーコンビは、バゼットにこれまでのことを語りだしていった。

より確実に、彼女とランサーの協力を得るために。

\*\*\*\*\*

????

「それで、実際にセイバーと交戦した感想は？」

『驚嘆と歓喜の一言に尽きます。英霊などという精霊級セイバーの存在に昇華とはいえ、元は人間の小娘ですからな』

謎の部屋で、フェニックスは『女』に報告を行っていた。

「だとしても、彼女は生前においてもゾディアーツと拮抗した筈……」

……。仮にも竜種の因子を継承し、精霊の加護と武具を得たとされる伝説の騎士王」

『はい。それは此方とて重々弁えております。しかし、話に聞いた第四次と比べて、今回のセイバーはド三流マスターが足を引っ張っているはずでございます』

士郎のことを露骨に嘲笑いながらセイバーの現状を口にしたフェニックスと、

「……………今はまだ、様子見か。……………となると、やはり確たる問題はただ一つ」

何やら顎に手を乗せつつ鋭利な声を出す『女』

「ファズム……………否、今はアヴェンジャー……………」

その名前を口にしたとき、『女』の眼は月光のような金色となっていた。

\*\*\*\*\*

「まさか、その様なことになっていたとは……………」

バゼットは上体を起こし、亡くなった左腕を擦りながら話しに耳を傾け、真摯にそれを受け止めていた。

アヴェンジャーとカースが八番目であることやゾディアーツ達がこの街で暗躍していることなどは、魔術協会の荒事専門である執行者の任に就いていたバゼットでさえ、聞いたことも見たことも無いイレギュラー要素なのだ。

しかし、どんなイレギュラーであろうと、今起こっている事柄は全て真実だ。

「申し訳ありません。私が言峰に不覚をとったばかりに、お手数をかけてしまって……」

言葉だけでなく、表情や仕草からも、バゼットからは謝罪の想念が伝わってくる。

「気にすることは無い。寧ろ君達と協力関係を結べたのは僥倖といえる」

アヴェンジャーはそう言った。

「そなたの左腕については、良い腕前をした人形師にでも発注するでしょう。下手に魔術協会の連中にバレぬよう、妾の伝手で野に下った者をあたってみる」

カースもバゼットの義手についてさらっと触れておく。

「まあ、あの人形遣いならば、金銭次第で異常に頑丈で馴染みやすいのを作ってくれよう。ついでに何か追加要素も頼むかえ？」

さらに忍び笑いをしながら、冗談のようでガチなことも言うってくる。



「こりゃ随分大盤振る舞いじゃねえか。後々のことが怖くなってるんな」

「こらランサー。折角の好意を無にするつもりですか？」

冗談交じりでモノを言うランサーを、バゼットが咎める。

それをみてアヴェンジャーが口元を綻ばせる。

「まあまあ。言いたいことを互いに言い尽くしたいなら、まずは再契約だ」

「あ、はい」

再契約、という単語を聞いて、バゼットは右手をランサーに向けて魔術回路を励起させながら詠唱を開始する。

「告げる 汝の身は我が下に、我が命運は汝の槍に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

それは召喚の際に用いる呪文の詠唱を行った上で、最後の二節を付け加えることで成立する。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

まるでマシンのように、淀みなく正確に一言一言が紡がれる。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

そしていよいよ、最後の二節。

「我に従え。ならばこの命運、汝の槍に預けよう

「！」

詠唱完了。

「ランサーの名に懸け、誓いを受ける。再びお前を俺のマスターとして認めるぜ、バゼット！」

魔力が枯渇寸前だったランサーの身体に、バゼットの魔術回路より精製されし魔力が流れ出し、その体躯の隅々にまで行き渡って行く。こうして、バゼット・フラガ・マクレミツは、ランサーのマスターとして復帰を果たしたのだ。

そして彼女の右手の甲には、最後の一画となったダブルセイバー型の令呪が刻み直された。

\*\*\*\*\*

衛宮家の居間。

流れのままにズカズカと入り込んできた遠坂凜は、セイバーを交えて、士郎にサーヴァントのなんたるかを教授していた。

しかしその前に、凜は色んな意味で呆れ返ざるを得ないことを聞かされる。

まず、士郎は工房の作成も、五大元素の扱いも、入門レベルの魔術も、使い魔の使用も、パスの作り方も出来ない、強化と解析のみといった、素人に毛が生えた程度の半々人前の魔術使いであること。よって、英霊について、サーヴァントについて、凜は士郎に事細かに話した。

次に、セイバーとの繋がりであるラインが不安定で魔力が満足に供給されておらず、霊体化することもできないということが判明する。普通なら此方の不利な状況を敵に伝えるなど愚の骨頂だが、セイバーは”隠していても何れ知られる”として、敢て堂々と話すことにしたのだ。

何より、士郎に現状を理解してもらおう為、凜により判りやすく説明してもらおう為。

「ああもう、ますます惜しいつ。私が貴女セイバーのマスターなら、こんな戦い勝ったも同然だったのに……!!」

凜はセイバーの凜々しい立ち振る舞い、騎士としての風格、美麗な容姿などから見て、心の底から思っている本音を吐き出す。

「なんだよ、遠坂。それじゃあ俺が相応しくないってことか？」

「当たり前でしょ、へっぽこ」

士郎は心の中で、うっ、と思った。

ヒトの気にしてることをこつこつもあっさり、言葉という槍で刺突してくる。

「さて、話も纏まったところで、そろそろ行きましょっか」

「何処へなんだ？」

「だから、貴方が巻き込まれたゲーム……”聖杯戦争”をよく知ってる奴に会いに行くのよ。衛宮くん、聖杯戦争について、もっと教えて欲しいでしょ？」

まるで塾の講師のように淡々と述べていく凜。

「それは当然だ。でもそれって何処だよ？もう夜中だし、あんまり遠くへは……」

「大丈夫、隣町だから急げば夜明けまでには帰ってこられるわ。それに明日は日曜なんだから、少し夜更かししてもいいじゃない」

とても優等生の言葉とは思えない。

まあ見ての通り、昼は淑女で夜は魔術師といった仮面優等生というのが実態なわけで。

「それにね衛宮くん。セイバーと派手にやらかしてくれただゾディアックって連中についても対策を立てなきゃいけないのよ。正体がなんであるうと、遠坂家の管理地でのさばり返らせるなんて暴挙は、断固として見過ごせないわ」

だがこの辺りは名門魔術師の若き当主としての誇りと自覚をありありと示している。

士郎も今の言葉を聞いて、歓喜にも似た感情が泉のように湧いて来る。

「ああ。その意見については俺も賛成だ。あんな連中の好き勝手にさせられない……」

セイバーを召喚する前、士郎は恐怖を感じた。アーチャーとランサーの対決、フェニックスによる心臓焼却など、下手を踏めばトラウマ必至の事柄だ。

しかし、それでも士郎はメモを読んで呪文を詠唱し、マスターとなった。

状況と内容を理解しきれて居なかったといえども、きっと危険なことになることを承知の上で。

それでも今こうして神秘の世界の奥深くに足を踏み入れたのは、一重にこのまま何もせずにはいられないという考えからであった。

「私も二人の言葉に賛同します。フェニックスらがもし、民草に無意味な被害を与える存在だとすれば、騎士の誓いにかけて討たねばならぬ敵です」

さらにセイバーまでもが乗り気になってきた。

「満場一致ね。じゃあ行きましようか。場所は隣町の言峰協会。そこがこの戦いを監督してるエセ神父の居所よ」

何故だろうか？最後の部分で遠坂の表情が小悪魔めいた笑顔になった気がする。

出発の間に、士郎はふと思考したのでった。

\*\*\*\*\*

霊子<sup>セラフ</sup>虚構世界

校舎に隣接している教会にて。

カタカタ、カタカタ

本来ならば信徒達が祈りを捧げるべき礼拝堂。

それが今や、数多の機械のモニターやキーボードを始めとする多種雑多な機械が所狭しと並んでいる。

そんな中でアヴェンジャーは、複数のコードをファズムドライバー

と接続させることで、ベルトとスイッチのメンテナンスを実行している。

「おうおう、こいつあまた」

すると、大きく重く扉を開けてくる男が一人。

「魔術と科学がごちゃ混ぜな工房もどきってトコだな」  
「仕様なのだから致し方ないだろう、ランサー」

青いボディースーツを纏ったランサーは、いかにも気軽な口調で言った。

「バゼットの傍にいないか？」

「心配ならいらねえ。少しだけ話したが、中々良い女だぜ、お前のマスター」

この様子から察するに、バゼットの看病はカーズに任せようだ。

「今日はもう流石に休むのか？」

「いや、もう一働きだ。今やってるメンテナンスも、今日最後の戦いの為だ」

「なんだよ、このあとデケエのが起こるってわかってるみてえじゃないか」

「その通り。昼間に買い物をするついでに町中を歩き回り、魔力探知装置を幾つか施してきた。先程セイバーの召喚が確認されたようだし、上手く機能しているようだ」

「ほお………セイバーか」

最優のサーヴァントのクラス名を聞くと、ランサーはどことなく戦

いに餓えた猛犬の表情となる。

何を隠そう　いや、隠すまでもないが、ランサーには聖杯に託す願い事が無い。

強いて言うならば、この聖杯戦争に参加して、自分以外の英霊達と命を賭けた真剣勝負ガチバトルをやりたいというのがランサーの本心なのだ。

「マスターである衛宮士郎は聖杯についての予備知識がないだろうから、今頃かなり混乱しているのだろうな」

キーボードを叩きながらアヴェンジャーが予感的中なことを呟く。

「まあ、召喚されて間も無く戦闘による激しい魔力放出を使ったよ  
うだし、御三家の誰かが来るってこともあるか。遠坂家を筆頭に」

「あの良い脚したお嬢ちゃんのことか？」

「ああ。彼女の性格からして、まずは戦闘より説明に入るだろうがね。もしかしたら、言峰のトコロに連れて行き、参加登録もさせるかもしれない」

言峰、という単語を聞くと、ランサーは露骨に舌打ちをした。

まあ当然のことなのだが。

「それで、お前は どうする気だ？」

「タイミングを見計らって二つの陣営に接触する。第三者的な陣営が  
登場し、ケンカ吹っ掛けて来たら撃退するのみ」

「おお、いいねえソレ。そんな時には、俺も混ぜて貰えるんだろうな  
？」

「さてな？時と場合によるな」

そうこうしてる間に、

カタンッ

” Maintenance Complete.”  
” PhasmDriver and AstroSwitch, R  
estart”

ファズムドライバーとアストリスイッチのメンテナンスが完了した。

\*\*\*\*\*

士郎と凜とセイバーは、屋敷から隣町の協会に向うべく、月明かりが照らす夜の道を歩いていった。

ただし、セイバーの格好には些か問題があった。

「ねえ、もうすこしましな服はなかったの？」

「仕方ないだろ。鎧は脱がないっていうんだから」

「」

下手をして何も知らぬ他人が眼にすれば、一発で不審者の烙印を押すこと間違いなしだろう。

青いドレスと銀の甲冑を隠すためとはいえ、大振りの黄色い雨合羽を羽織っているのだから。

だが、幸いなことにセイバーの姿を発見する一般人は居なかった。最近の冬木市は、謎の昏睡事件などが多数起こっており、その所為で住民たちは夜中での外出を控えているのだ。



正直なところ気持ち良い話ではないが、今の士郎たちにとってはグッドタイミングと言えたかもしれない。

歩きに歩いてソレ相応の時間が経過し、三人が教会の前にまで辿り着く。

そこを目の前にして、士郎はふと思った。

”他の連中はどうしてるんだろうか”

他の連中とは、十年前におきた謎の大火災において、家族を失った孤児らのことだ。

実は士郎もそんな孤児の一人で、とある男　衛宮切嗣きりつぐの養子となつたのだ。

だが、貰い手の居なかった子供たちは、孤児院へと預けられていた。

その孤児院が、この冬木教会という訳だ。

故に、士郎はこの教会に対して近寄りがたさを覚えていた。

自分だけ、里親を得た自分が、のうのうと孤児院で暮らしている人間と顔を合わせてよいものかと。

そう考える士郎であったが、

「シロウ。私はここに残ります」

「え？」

「私はシロウを護る為にここへついてきたのです。目的地が教会なら、これ以上遠くへはいかないでしょう」

と、教会の扉を前にしてセイバーが言ってきたのか。

士郎はそのことに反論する材料がなかったので、セイバーの言い分

を呑んで、凜と二人で教会に入った。

セイバーはそんな二人の後ろ姿を静かに見守っている。そこにはただただ研ぎ澄まされた刀身のように澄んだ気配しかない。

でも、一滴の雫を水面に落とす音が聞こえた。

「っ」

セイバーは音のなった方へと顔を向ける。

転換された彼女の視界には、淡い『光の門』があり、一つの人影が姿を現出させる。

「何者だ？」

セイバーは身構えながら問う。

姿を見せたのは、黒い服装をした銀髪碧眼の青年。全身から感じ入る魔力の波動からしてサーヴァントであることは一目瞭然だ。

「八番目のサーヴァント、アヴェンジャー」

「八番目、だと？ふざけているのか……!!」

通常、聖杯戦争で召喚される英霊の枠組みはクラスの数と同じ。つまりは七という事になる。

故に、八人目が登場するなどありえないことだ。そんなことが起こり得れば、聖杯の魔力がもたないだろう。

「ふざけてなどいない。第一今夜は戦いに来たわけではないのだし、構えを解いてくれないか？」

「断る。敵の前に堂々と姿を晒しておいて、戦いをしないなどとい

う虚言を吐かれても信用することはできない」

「はああ………御偉い騎士サマは堅物でいかな」

アヴェンジャーは深く溜息をつく。

因みにその溜息には『君の方こそふざけているように見えるぞ。特にその雨合羽』なんて意味も籠っていたことを追記する。

「やはり来るタイミングが早かったか。衛宮士郎がこの場にいれば、円滑に話を進められただろうに」

「なぜ私のマスターの名を知っている？」

「なぜもなにも、彼に召喚の呪文を教えたのは僕だからな。彼となら確実により良い関係で同盟を締結できたらうしな。まあ出てきたら話し合うだけだ」

と、アヴェンジャーはマイペースで話題を進めていく。

「その間にだがセイバー、少し世間話でもして時間つぶしでもしないか？」

「それはサーヴァントとしての私を玩弄する言葉に観えるのだが………」

「バカにするつもりはない。本当にただの暇つぶしだ。例えば、そうだな、君が聖杯に託すことを聞かせてくれないか？」

「………それを聞いたとしてどうするのだ？」

セイバーは拒絶の意志を示すかのように、表情を硬くする。まるで、己の願いを匿う様に。

「どうもしない」

アヴェンジャーは淡白に述べた。

「ま、言いたくないならそれでもいい。誰だって後ろめたい事の一つや二つはある」

「なら、貴方は此処へ何をしに来た？」

「さつきも言ったとおり、衛宮士郎と同盟を組みに」

正直に語るアヴェンジャーだが、セイバーは今一信用していない。それもそうだ。いきなり見ず知らずのサーヴァトが現われ、同盟を組みに来た、などと言われて即座に受け入れる虚け者はいないだろう。

「我がマスターと同盟を結ぶというのであれば、信用に足るだけの示しをつけて欲しい」

「ふむ……ならば、今後に起こる戦闘でそれ相応の活躍をすれば、信用してもらえるのだな」

一人納得したかのように、アヴェンジャーは頷いた。

セイバーは少々疑問に思うものがあり、口を開いて質問しようとする。

しかし、

ぎい

教会の扉が開き、一人の少年と一人の少女が出てきた。

監督役の言峰から話を聞き終えた二人は、真剣な表情で教会から出たのだが、その直後にアヴェンジャーの姿を見て、表情は一気に変化する。

「っ サーヴァント！」

「あんだ、あの時の……！」

「やあ、衛宮士郎、遠坂凜」

慌てる二人に対し、アヴェンジャーは到って余裕だ。

まるで十年來の友人と再会したかのような気軽さで挨拶してくる。

「待っていたぞ。堅物と暇つぶしながら」

「誰かが堅物ですか！」

なんかセイバーが文句をたれているが、本筋とは無関係なので放って置こう。

「あんた、なんであの時、助けくれたんだ？」

「あの時は君にセイバーを召喚させる準備とランサーを引き込むという事柄一石二鳥で行えたのでね。それに僕としては、君と、その周囲の人間が如何にかなってしまふことは、受け入れ難いことでもある」

「どうして、そこまで……」

「ちよつと待って頂戴」

士郎とアヴェンジャーが応答をしていると、凜が横槍を入れてくる。

「貴方、昼間に暴れ回っていたサーヴァントよね？」

「如何にも」

話し相手が変わろうとも、アヴェンジャーは臨機応変に対処する。

「ゾディアーツって連中について、心当たりないかしら？」

「心当たりも何も、奴等とは生前からの因縁だ」

「それはつまり、そいつらが古い時代から現代まで生き永らえている、という意味？」

凜はまだ本物のゾディアーツを知らない。  
だから凜にとつてのゾディアーツとは、吸血鬼や幻想種のようなものだと考えていた。

そして、サーヴァントとは得てして過去の時代より来たりし存在だ  
という固定観念もあつたのだろう。

「待つてください、凜。私は一度フェニックスと交戦しましたが、彼の正体は吸血種や幻想種の類では無いと思われます。それに自身のことを『星の使徒』と言っていました」

セイバーも話に参加してくる。

「その通りだ。ゾディアーツの正体は、何かしらの理由で宇宙の闇に実を投じた只の人間」

「ただの、人間だって………?」

その暴露に士郎は信じ切れぬ思いに駆られた。  
サーヴァントなどという法外な存在と渡り合える存在が、只の人間が変じた姿などと、誰が思えよう。

「ゾディアーツとは、アストロスイッチでコズミックエナジーのチャンネルを開き、そのエネルギーをマテリアライズしてニュークリーチャーとなつた存在　つまりはエネルギー体だ。尤も、この地にやってきた幹部の配るスイッチは、従来のものとは若干違つようだが」

「つまり、そいつらは元は普通の人間で、特別な道具を使ってあんな姿になるってことか？」

士郎の解釈にアヴェンジャーは黙って頷いた。

「なあ、もし良かったら」  
「勿論、協力はするつもりだ。もとより、同盟の為にこうして足を運んできたのだから。一応、マスターからの許可も下りている」

士郎は思わず喜んでしまった。

その正体こそは不明だが、様々な情報を有しているサーヴァントが、自らの意志で協力を申し出たのだから。

「そちらの御二方は……まあ行き成り信用してはくれないだろう。実際に同盟を結ぶか否かは、これからもの付き合い次第で決めてくれ」

「そうさせてもらおうわ」

「……はい」

冷えた口調ではあるが、取り合えずこの場でのドンパチは避けられそうである。

しかし、飽くまでそれはこの場での話しだ。

「では、今後のコ

ッ！」

「ど、どうした？」

行き成りアヴェンジャーの表情が厳しく引き締まったものとなり、士郎が声をかけると、

「魔力の気配……それもかなり大きいものだ」

「わかるの？」

「町中に簡単な探査器具を仕掛けをしておいた。この強烈な波動は、ほぼ間違いないサーヴァントだ。今丁度、深山町の住宅街に入ったところだな」

昼間に予め仕掛けた魔力察知のソレは、アヴェンジャーの魔術回路と部分的に連動しており、魔力を帯びたものが触ったり近づいたりすると、持ち主の身体に直接訴えかける仕組みとなっている。

「さて、どうする？」

アヴェンジャーが問いかけると、

「……セイバー、頼めるか？」

「無論です」

「じゃあ私は、後ろで控えているわ。別にいいでしょ？」

「ああ、一向に構わない」

そう答えたアヴェンジャーの口元は何故か微笑んでいるように見えた。

\*\*\*\*\*

新都の冬木教会から、冬木大橋へ、深山町へ。

四人は急ぎながら道を走っていき、そして坂道の十字路へ到達した。坂道の十字路は、行く方向によって深山町のそれぞれの区域に向うことになる。

例えば、士郎の住む衛宮邸のような和風建築が中心の住宅街、凜が住む遠坂邸のような西洋建築が主体の住宅街、穂群原学園へと向う



道、などである。

「此処にいれば、イヤでも鉢合わせする」

開口一番でアヴェンジャーが会戦を示唆する。

その言葉の裏には、覚悟はできてるか、とあるようにも思える。

「なあ、俺にできることってあるか？」

「今のところは、なにも」

「シロウ。貴方は凜と共に後方に行ってください」

「そうよ。あんた強化だってマトモに成功させた試しがないんでしょ？下手踏んで足を引っ張るだけよ」

なお、初っ端から土郎が精神的に玉砕させられたりもしたが、今は脇に置いておこう。

「さて……すぐそこまで、来ているのだろうか？近づくが良  
い、相手をしてやろう」

アヴェンジャーは物音一つしない夜の十字路で独り言のようできて、  
確実に誰かに語りかけた。

挑発するような声音はそのまま虚しく闇夜へと沈んで消えていきそ  
うな雰囲気も漂っている。

だとしても、今の言葉は決して無意味ではない。

「へえ、面白いこと言うね」

幼い少女の声に乗って、問いかけの答えが返って来たのだから。  
全員は声のした方向へと即座に振り向いた。

くすくす、と年相応に笑う少女。

紫色の高貴な服装をし、雪のような銀髪と血のような紅眼をした、150cm未満の幼い少女。

まさに雪の妖精という二つ名を与えるに相応しい可愛らしさである。

「  
」

もつとも、その背後に鉛色の巨人が居なければの話だが。

「こんばんわ、お兄ちゃん。会うのはこれで二度目だね」

鉛色の巨人を背後に侍し雪の妖精。

その姿に、士郎は一度だけ覚えがあった。

”早く呼び出さないと死んじゃうよ、お兄ちゃん”

この聖杯戦争に参加する二日前の夜、帰り道で見かけた、あの少女だったのを今にして思い出す。

「ふっ……バーサーカーか。こいつは、全力でやらねば失礼だな」

アヴェンジャーは何処かしか面白そうに、ファズムドライバーを手中にし、装着した。

右手でサークルとクロスの、左手でトライとスクエアのトランスイツチを押しした。

右手でエンターレバーを強く握ると同時に、左手を構えるアヴェンジャー。

その一連の動作に、彼以外の者達は何だと思って眼を見張った



狂・気・来・襲（後書き）

次回、仮面ライダーファズム！

狂・V・S・狂

英雄スィッチ・オン！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9845y/>

---

Phasm/Maskd rider

2011年12月29日14時46分発行